

白のエルフさん

あじぽんぽん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

日本とは少し違った異世界日本が舞台の物語

木森シロウ、優しいが小心者で頭もあまり良くない冴えない少年

彼は取り替えっ子病……ガチャ病にかかり朝起きたらエルフになっていた

『あさおんえるふ』である

そんな彼……彼女が何とか生きていく物語

なろうでも掲載しています

# 目次

あさおん	1
この世界	8
エローフ姫	17
魔法少女	26
隣人	35
食べ放題	44
お買い物	52
風の精霊	64
家族	78
アンティーク	87
喫茶店カネダ	96
カナメの弱点	105

ファーストフード	114
帽子屋	127
お客さん	141
魔術文字	150



# あさおん

朝、木森キモリシロウは目を覚ましたら女になっていた。

まじですか、と……心の中で呟く。

紛れもなく女だろう……。

胸になにかが乗っている感覚があった。

覚醒にはほど遠い意識で、衣服のうえから触って確認した。

ないものがあつて、あるものがない。

寝たまま、謎の染みがついた天井をぼんやりと見つめる。

両の手をかざせば、折れないか不安になるような華奢な腕があった。

カーテンの隙間から朝日が当たる。

伸ばした指先は白魚のような美しさである。

シロウは芋虫のようにモゾモゾと体を震わせた。

うんっ……と、毛布を横に蹴り飛ばす。

その足は細くてしなやかなものであった。

体が小さくなっている？

昨夜から着ている、よれよれのTシャツとトランクスだけが、少女がシロウである事を証明する唯一の証拠である。

シロウの意識が徐々に覚醒を始めた。

最初に思ったのは、職場の事。

強い焦りを感じる、このままでは非常に不味いのでは、鈍い頭でも気づきだしたのだ。シロウは慌てて布団から跳ね起きた。

そして古畳の上を、膝で這いずるように移動して、折りたたみ机に手を伸ばす。

置かれた小物の中から安物の鏡を取ると、寝ぼけた目でピントを合わせる。

映ったのは歪んだ鏡面でもはつきりと分かる現実離れた美貌であった。

うん……？

しかし、それを認識する前に違和感を覚え、鏡を真横に動かす……耳が長い？

「エルフっ!？」

ぼうっと見ていたシロウはようやく叫んだ。

頭の回転がよろしくない彼は、ゆっくりと理解する。

ええっ、と声をだしながら、ええっ、と手鏡。

長い耳を指でこわごわと摘まんでみると、ぴくぴく小さく動く……ええつ、可愛い。鏡には白銀色の髪を持つ、妖精のような美しき少女が存在していた。

先ほどまで焦りが霧散して驚きに取って代われ魅了される。

それは現実逃避ではない……美しいものを見た際に生き物が感じる、原始的な感動であつた。

そのときだけ、女になつたという事実も、シロウにとつて些細な事へと落ちてしまつた。

たぶん、男の性ままでもシロウは鏡を見続けただろう。

それほどまでに、エルフの美貌とは浮世離れたものであつた。

美しさに唯々、見惚れて、シロウは女座りのまま背を丸めて鏡に見入つた。

初めて鏡という文明の利器を手に入れた、太古の女のように。

「……………!?!」

シロウは不意に気づく、いや、思いだした。

己の中に湧き上がった悪魔のような考えにためらいを見せた。

しかし、やがては柔和な顔が、キユと眉を寄せた決意の表情となる。

真剣な顔である……でも可愛い。

シロウは姿勢をただして正座になると、静かに鏡を置いた。

見下ろすとお腹が見えなくなるサイズであった。

体にあつてないダボついたTシャツだが、胸だけはパツンパツンなのだ。

「いわゆるひとつの、巨乳というやつだろうか？」

目を閉じて、すーはあーすーはあーと深呼吸を繰り返す。

その姿は自らの限界に挑む、孤高のアスリートのようだ。

やがてシロウはTシャツの裾から中に、すくいあげるように両手を差しこむ。

自らのおっぱいに触れるため……直触りである。

そう、シロウは自分の今の体が女であると思いついてしまったのだ。

となれば、臆病な彼とはいえ、やることは一つである。

性別が転換したのならば、その性を象徴するものに触れるのはごく自然な流れである。

けっして男子のスケベ心ではないのだ。

ごくぐりと白い喉を鳴らす。

指がTシャツの布地と、柔肉に軽く挟まれた。

小指と薬指、中指と人差し指、そして最後に親指で……球体をホールド。

それはシロウにとって、赤子の時以来……おそらく母親以外の初揉みであった。

強くは握らない。



いつか遭遇するかもしれない実戦のために、何度も念入りに繰り返した脳内練習どおり痛がらせないように触れていく。

五指に伝わるのは、しつとりと吸つくのに弾力と重さのある確かな感触であった。少女の透明な美貌が、見る見るうちに、だらしのないモノへと変化した。

乳の柔らかさに、初めて味わう素敵な感触に、深い喜びを見だしてしまったのだ。

木森シロウは童貞……いや、今は処女である。

亡き母親を思いださせるような優しい柔らかさ。

性的な気持ちの良さなどは特に感じない。

所詮はただの脂肪の塊である。

だが癖になる手触りに、シロウはたちどころに夢中になった。

その姿は美少女のはずなのに、自慰行為中の男子にも似た物悲しさがあった。

ゆるゆると豊かな乳房を自由に、あるがまま、思うままに揉む夢のような至福の時間。

だが夢はいずれ覚め、残酷な現実がまっているものだ。

「はっ！ ぼ、僕は何しているんだ!？」

シロウは我に返る。

恥ずかしい、虚しさはないが自分の行動が、ただひたすらに恥ずかった。

誤魔化のように咳払いをすると、シロウは再び鏡を手にとって自らの姿を観察する。

映る姿は一言でいうのなら極上の美しさだ。

この顔の持ち主が自分自身でなかったら、見ただけで硬直して、口を開けたまま何もできなくなってしまうだろう。

それほどの美貌、その程度にしかな女に耐性のないシロウである。

「……やっぱりエルフかな？ あ、あれ、ひよつとしてハイエルフ？」

白銀色の髪に紫水晶のような色合いの瞳。

以前観た、帝国テレビジョン放送のエルフ特集の番組。

そこで紹介されたエルフの上位種という、世界で一体しか確認されていないというハイエルフの特徴そのものであった。

容姿にコンプレックスのあるシロウは、「エルフ美形、うらやま、うらめしいな」と眩きながら熱心に観ていたので間違いない。

「これって取り替え<sup>ガ</sup>つ子病<sup>チャ</sup>だよな？ 病院の治療、お金いくらかかるかな……保険はきくのかなあ」

世情に疎いシロウでも知っている有名な病気、故に中途半端な知識しかなかった。非常に不安になる。

打ち消すためにTシャツの上から一揉みすると、何故かオニギリが食べたくなった。ひどい空腹をシロウは覚えていたのだ。

シロウは病院が開く前にご飯を済ませておく事にした。

彼が常日頃から論理的に、客観的に物事を捉えられる人間なら、自分の身に起こった変化は肉体だけではないと、この時点で気づく事ができたのかもしれない。

早生まれのシロウが十五の誕生日を迎えてから半年ほど経っていた。

中学を卒業してから職について働いている。

決して頭が良い人間ではなかったが、高校へと進学ができなかったのは家庭の事情だった。

片親だった母が亡くなっているからだ。

シロウは母から、父はシロウが産まれる前に亡くなっていると聞いていた。

保護者代わりとなる者はいるが、援助をしてくれる者は存在せず、またシロウもそれを望まなかったので、自らを養うために働く必要があった。

これは、そんなシロウが自分なりの幸せを見出し生きていく物語。

## この世界

魔術や仙術などの様々な術による科学が発達した文明世界。

目を凝らせば電柱の下にすら神を見出せる。

起源の古い国ほど強力な神が宿り国を守護をする。

神は形を成して知を授け、武を示しては、フアミレスでワンコインランチを食べる。

そんな世界で、様々な種族の中でも人間種だけがかかる特殊な病気があった。

取り替えつ子病。

人間種が十五の年を迎えた一年の間だけ、発病する可能性があるという奇病。

三百人に一人の確率で発病すると言われ、病にかかった者は例外なく人間種以外の種族へと肉体の変化を起こしてしまう。

人種や遺伝子の形状に関わらず発病し、様々な種族に変化する細分化性のため、有効な予防治療は未だに確立されてはいない。

しかし長年の研究から、一度変化した種族から人間種に戻ることは可能になっており、現在では治療可能な病気としてインフルエンザ程度の扱いであった。

誰が何の種族に変化するか、その発生原因が解明されてないため、一昔前はクジ引き

病、今ではガチャ病と言われている。



アパートにはご飯は無かった。

休日のため、買い置きしていた食料が全て切れていたのだ。

現在の時刻は七時十六分。

シロウが利用しているスーパーが開くのは十一時である。

開店する時間が遅いのは、それなりの田舎だからだ。

エルフの少女の胃袋が、キュウキュウと哀れに鳴いた。

普段ならお店が開くまで我慢するが、今朝に限ってはお腹が空いて仕方がなかった。

この飢餓感はとて耐えられそうになく、シロウは近所のコンビニに買いに行く事にしたのだ。

よれよれ、パツンパツンのTシャツはそのままに、ズボンはスウェットを履いた。

小柄な割には足が長いので、ズボンの丈は合うのだが問題は横幅であった。

ズボンはウエストのサイズが大きくて、ベルトを使ってもずり落ちるのだ。

人間種とも違う、エルフ特有のアニメのような体形であった。

苦勞してズボンをあげて背中を見れば、ズボンの隙間からプリンとした白いお尻が丸見えになっていて、シロウは人知れず赤面をした。

こんな状態で外に出ていたら恥をかいていたところだ。

仕方なく冬の寝間着代わりに使っていたボロいスウェットを引っ張りだして、紐を強引に絞って着けたのだ。

靴も合うサイズがなかったので、安物のゴム製サンダルなのだが、大きいスリッパのようで少々歩きにくい。

「戻ったら体を調べてみるかな……」

病院に行く前に確認は必要だよね……うん。

シロウはエロ心を隠す事を眩き、薄い財布を手にとった。

築三十年は超える古びたアパートだ。

シロウの部屋は二階の端の方である。

立ってつけの悪い扉を閉めると、すぐ目の前に錆だらけの急な階段が見えた。

トントンと軽快に降りていく。

いつもなら軋む音が全く聞こえなかった。

急な上下の動き、ブラジャーを着けていないにも関わらず、大きい乳房はまったく揺れない。

今までの人生で恋人がいたためしがなく、同年代以上の若い女性と触れあう機会がほぼないシロウにそれを不思議がる気持ちはない。

それどころか、

「女の胸つてアニメみたいには揺れないんだね。これが現実なのかな」

よく分からない納得の仕方をしていた。

舗装のされてない田舎道をテクテクと歩きだす。

体の不都合さは感じない。

むしろ飛び跳ねて走れまわれそうなほどに軽やかだった。

何となく気分分、朝の空気を大きく胸の中に吸い込むと、今度はおっぱいが揺れた。

おお、と感動の声を上げるシロウ。

コンビニ付近の舗装されてた道まで来ると人通りが増えてきた。

田舎ゆえに移動には車が使われる事のほうが多いが、それでも学校やビルが並んでいる場所だけに歩きの人もそれなりにいる。

スーツを着た若いサラリーマンや、朝の散歩らしき犬を連れた老人。

学生服やジャージを着た少年少女達などが見えた。

歩く者はみな人間種か、それほど異形の少ない種族の者達だ。

都会とは違い、見た目で分かるような異人種はあまりいない。

シロウは、道ですれ違う人に、いつもより見られている気がした。

特に学生の集団などは顕著で、シロウが通ると立ち止まって、そしてシロウが通りすぎた後にヒソヒソ、ドッと笑うような大きな声をするのだ。

楽しそうな同年代の若者達である。

シロウの中に苦いものがこみあげ、言葉にしにくい感情が浮かぶ。

自意識が過剰なのだろうとは思っている。

それでも中学時代に容姿の事でよく馬鹿にされて、虐められた過去をもつシロウにとっては、彼らのような明るい集団は心穏やかに接する事ができないのだ。

駐車場の広いコンビニに入る。

レジに店員、そして雑誌を読んでいる背広姿の犬耳中年男性しかいなかった。

シロウが雑誌コーナーの前を通ると、気づいた犬耳中年男性がチラツとこちらを見て本に目を戻し……と、思ったら再びシロウを見て、慌てた様子で手に持っていた成人雑誌を棚に戻した。

背中に視線を感じたが、小心者のシロウは気づかない振りをしてお弁当コーナーへ向かった。

棚を確認するとオニギリはほぼ売り切れていた。



落胆して溜息をつく。

床には新しいオニギリの入ったコンテナが積み重ねて置いてあったが、この中から勝手に取るのは良くはないだろう。

店員に聞いてみるという社交性はシロウには無い。

それでも未練がましくウジウジと眺め、やがて諦めて、他の食べ物を探そうとしたそのときであった。

「あ、あの、お、お客さん？　な、何かお探しですか？」

「えっ!？」

突然に話しかけられる。

横を見ると若い男の店員が立っていた。

近づいて来る事にシロウは気づいていたが、まさか自分に声を掛けてくるとは思っていなかったのひどく驚いてしまった。

「ご、ご希望のものがありませんか、お、お取り致しますか？」

「……オ、オニギリ」

対人に難があり、人見知りのシロウは欲しい物を、ぶつ切りの単語でしか伝えられなかった。

自分に嫌悪を覚えながら、慌ててシロウは言葉を足そうとする。

だが、先に口を開いたのは店員のほうだった。

「あ、オニギリですか？ えっ、えっと……そ、それじゃ食べたい具の希望とか、あ、ありますか？」

店員は頬を染め緊張した様子で、無意味に肩を揺すりながら話している。

彼の容姿は、髪はボサボサで肌が青白く体はひよろひよろ、いかにもサブカルチャー好きな野暮つたい青年といった感じだ。

シロウはファツシヨナブルなりア充やイケメンが苦手だ。

彼らを前にすると、自信のない容姿故に口数が少なくなり挙動不審になってしまう。

しかし、この年上と見える若者には安心と親近感を持った。

それどころか尊敬すら覚えた。

青年はシロウと同じで、コミュ能力が高そうには決して見えない。

だが、シロウが困っている様子を見て、わざわざ話しかけてきてくれたのだ。そこまでする必要のないアルバイトだろうに。

人の親切にシロウの心が温かくなる。

「梅、ツナ」

優しさに、しっかりと応えようと思った矢先に、でた言葉は拙くて短い。

またしても自己嫌悪。

少しでも印象を良くしようと、ぎこちないながらも笑顔を作る。

やつてから木森のキモスマイルと、中学生時代に女子からよく馬鹿にされていたのを思い出し、またも自己嫌悪だ。

シロウは中々に面倒くさいやつであった。

「は、はい！ 梅とツナですねっ！ 何個必要ですかっ!？」

しかしシロウの笑顔を……エルフ美少女の、ややぎこちない、恥ずかし気な笑顔を見た青年の反応は劇的である。

赤かった頬をさらに染めて、とても嬉しそうな顔を見ると、畳み掛けるようにシロウに聞いてきた。

その勢いに「う、うおう……」と押されながらもシロウはゆつくりと指三本を立てる。

それから、これじゃ分らないと気づいて右手に一本、左手に二本を順に立てていく。

「梅1……ツナ2……で、お願いします」

「はいっ！ かしこまりましたー!!」

今度はしつかりと言えた……言えたよ!!

シロウはプルプルと震えた。

青年の打って返すような返事が心地よい。

達成感に心の中の水位が増える。

そこで違和感を覚えるが、それが何かを考える余裕はシロウにはなかった。

印象をよくするために、キモくならない程度に青年に微笑む。

「う、ひゃあああつ!？」

途端に彼は奇声をあげて、首筋までを真っ赤にすると、オニギリを持ったまま走るような勢いでレジに飛び込んだ。

シロウは落ち込んだ、そんなにキモかったのかとひどく後悔した。

「あ……………」

そして飲み物も買おうかと少しだけ迷い、小心のため言いだす事も出来ず、青年の後を追ってレジへと向かった。

500mlペットボトルのお茶を、サービスで一本貰った。

思いがけない幸運に、シロウは心から喜んで店員の前で笑顔を見せる。

店員も蕩けるような素敵な笑顔を浮かべていた。

お互いにニコニコ。

青年の気持ちのいい挨拶に見送られてシロウは店をでたのだ。

節制を心がけているシロウだが、このコンビニにはまた行こうと思った。

## エローフ姫

アパートに戻る前にシロウが来たのは小さな公園。

遊具は砂場とブランコ、そしてベンチしかない寂れた風情であった。

住宅街に必要とされる避難所として設置された公園である。

そんな世間の事情はシロウには分からない知らない。

ただ、折角のオニギリである。

青空の下で食べれば美味しいだろうと突拍子なく思いついて立ち寄ったのだ。

木の影からコソつと公園内を確認するシロウ。

傍目に見れば、木陰から人間の様子をうかがう絵本に出てきそうな可憐な妖精である。

昨日までの容姿なら、お巡りさんされるような、明らかな不審者だったが。

それはそうと、平日の朝から寂れた公園に来るような暇人は滅多にいない、そこまで警戒をしなくてもよさそうなものだが。

「よ、よし誰もいないな……」

小動物のような、きよろきよろとした自信なさげな歩き方。

エルフの少女は、半透明なコンビニ袋を片手に背を丸めて公園内に侵入した。縁が欠け丸くなった木製のベンチを発見、そして歩みよるとゆっくりと座る。

安堵の溜息、見渡す周囲には人はいなかった。

食事をする場所ならまだしも、それ以外の場所で食事をする勇氣はシロウにはない。誰もいないならともかく、人前でも食事はなんだか恥ずかしいのだ。

ベンチは見た目のぼろさに反して厚みのあるしつかりとした作りで、長年の使用により磨かれたのか、撫でるとつるつるした木の感触である。

「ふふ、素晴らしく頑丈、流石は我らが大日本帝国製だ」  
シロウは背もたれに深く腰を乗せる。

背伸びして見あげた空は、雲の一つもない蒼天だった。

それほど悪くない座り心地に単純なシロウはすぐにご満喫だ。

でも、残念ながらそのベンチは外国製である。

早速食事をしようと、シロウはコンビニ袋を探った。

手につかんだのはツナオニギリ。

梅は二番目に食べる予定だったので幸先がいい。

包装紙を剥がそうとしたところで、シロウの長いエルフ耳が意識もせず上下に動いた。

田舎特有の環境音に紛れて微かに聞こえてきたのは、複数の足音と甲高い声であった。

ビクリつ、と、体を震わせ不安を覚えるシロウ。

オニギリを袋に戻して、それから、ど、どうしよう？ と怯えた。

野生動物のように音を聞きわけられる事に関して、何の疑問も抱かない。

公園に近づいてくるのは、タツタツタツ、という軽めの足音だ。

怖いのならば一旦公園から逃げればいいのに、その判断も下せぬほどシロウは鈍い。

来ないで、と、公園の入り口に祈るような視線を向ける。

だが悲しいかな、公園の神様には聞き届けてはもらえなかつたようだ。

あるいはそれは、予定調和だったのだろうか？

駆けてきたのは園児服を着けた幼女、ぼつちりと目が合ってしまった。

「あ……あつ！ あつー！ エローフ姫がいるよお——!!」

「!?!」

大きい目を丸くし、顔いっぱいを口にした幼女が突然、怪鳥の叫びで先制攻撃だ。

超音波のような甲高い声。

エルフの少女は小動物ハムスターのように竦んだ、効果は抜群だ!?

シロウのベニヤ板並みに薄い精神防壁は、一瞬で突破され混乱状態に陥る。

「え、メグちゃんどこどこー!？」

「ばかだなメグ、エローフ姫なんているはずないだろ？」

「いるもん! そこっ! そこにいるもん!!」

「あ、あ、あ、あっ!？」

仲間を呼ばれた!？」

幼稚園児が増えた!？」

エルフの少女は状況についていけず、カクカクプルプルと震えた。

そう、シロウは幼児というものが苦手だった。

中学生の頃である。

帰り道での事だった。

まったく知らない少女に服の裾をつかまれて泣かれてしまう。

途端に周囲の人の無遠慮の目に晒される。

小心者であり注目されるのがひどく苦手なシロウ。

胃が痛くなるようなストレスを感じながらも、しどろもどろの言葉で少女を落ちつか

せて、泣いている理由を何とか聞き出した。

少女は迷子になっていたらしい。



人のいいシロウはすぐに近くの交番へ連れて行こうとした。

しかし、突然、後ろから強く突き飛ばされ転ばされてしまう。

『あんた！　うちの子に何してんのよっ!？』

やったのは、買い物籠を持った幼女の母親だった。

シロウは変質者扱いをされて交番につきだされてしまう。

最終的に誤解は解けたが『そんな人攫いをしてそうな不細工な顔をしているのが悪いのよ!!』と彼女からは一切の謝罪はなかった。

同情する警察官の視線が今でも忘れられない。

シロウはひどく惨めだった。

母から貰った母に似ない容姿。

普通の者より明らかに劣った容姿である。

それでも「シロちゃんはハンサムだよ」と母は褒めてくれた。

亡き母が褒めてくれた顔を、それを侮蔑する相手に何も言えなかった自分が惨めだった。

泣き出しそうな幼女もいた。

心優しいシロウは歯を食いしばるしかなかったのだ。

ああ、お母さん、親不孝でごめんなさい……。

「はっ!？」

過去のトラウマに苛まれて、現実逃避ぎみに意識を飛ばしかけていたシロウ。気がついたら幼児達に取り囲まれて、逃走経路を断たれていた。

女の子が二人と、男の子が一人である。

女の子二人が、小さいモミジのような手をシロウの太ももに乗せていた。

慌てるが、無理に跳ねのけると怪我をさせそうで、怖くて動く事ができない。

無垢な瞳で、シロウの事を、じつーと見あげてくる幼児達。

料理人に見下ろされている、まな板の上のコイの気分だ。

泣かれて、騒がれて、不審者扱いされたらどうしよう? シロウの額から変な汗がで

る。

「ねっ? ねっ? ねっ? お姉ちゃん、エロフ・エロフ姫だよね!？」

「本当にエロフ姫だ! お姉さん、どうしてそんなに耳が長いのか!？」

「俺知ってるよ。エロフ種族だから耳長いんだよね?」

「エ、エロ……フ」

エロフ・エロフ姫。

それは幅広い年齢層に人気の国民的な長寿アニメ。

『魔法少女タフ&クール、二人はナイスガイッ!』に出てくる登場人物だ。

初期のエロフ・エローフ姫は準レギュラーポジションだが、主人公のタフガイ真とクルルガイ薫を影ながら支える、非常に人気の高いキャラクターであった。

その華奢で可憐な姿はエルフ種族をモデルにしていると製作スタッフからも公言されており、今のシロウの容姿は幼児達にはエロフ・エローフ姫に見えるのだろう。

というか主人公の幼女二人が魔法少女に変身するとマツチヨイケメン男前になるので、必然的に人気が出てしまったキャラなのだ。

「ち、違うよ」

しかしシロウは今の自分の容姿がエルフだという事をすっかりと忘れていた。

少女の体に馴染みすぎている事に、こんな状況でもなければ疑問を覚えただろうが、ブサ顔の自分がエローフ姫なんてトンデモナイと否定する事で精一杯だ。

そんなエルフの美少女に幼児達は——幼女二人はキョトンとした。

「え、ええっ……違うの!？」

「でもお姉さんの耳長いよ？」

「メグ、リコ、あれアニメだから本当の事じゃないんだよ」

「あ……そうそう、そうなんだ」

聡そうな男の子の言葉に、シロウは小さい頭を必死に上下させた。

確実に十以上は年下の幼児にフォローしてもらおう妖精だがほのぼのとしている。

これが元のシロウの姿なら、いや普通の容姿の者なら失笑ものだろう。  
ただし美形イケメンに限るは、男女平等である。

「エ、エローフ姫じゃ、ないの……?」

「わっメグちゃん、どうしたの悲しいの!？」

「うわっ! メグ、泣くなよっ!？」

「うう……だつてえ……だつてえ……」

メグちゃんがぐずりだしたよっ!？」

シロウは慌てふためく。

過去のトラウマが脳内でリフレインして、咄嗟に、誤魔化すための優しい嘘をついてしまう。

「は、はーい! エローフ姫だよっ!？」

ぎこちないながらも、ニタツと笑ってメグちゃんに手をふる。

すると、今にも泣きだしそうだった幼女の顔が、ぱあつとほころんだ

「エローフ姫っ!!」

「は、はーいっ!」

「きゃあ! きゃー!!」

メグちゃんは幼児特有の怪音波を発生させながら、エルフ少女の華奢な腕に両手で抱

きつくと、ブンブンと嬉しそうに左右に振りまわし始めた。

シロウが少しだけ安心して残り二人の幼児に目を向ければ、もう一人の女の子も目を輝かせ、男の子の方は『お姉さんも大変ですね』的な同情の視線である。

彼は常日頃から苦労してそうだ。

「エローフ姫っ！ あれやってあれ！」

「は、はい……あれっ？」

幼児特有の主語ぶち抜け要求に、幼児慣れしていないシロウは戸惑ってしまふ。

「あれ……あれ、はーとふる……なんだっけリコちゃん？」

「メグちゃん、エローフプリンセスの必殺技の事？」

「ハートフルセクシーダイナマイツツ!! だろ？」

「そう、それぞれ！ 流石はタクちゃんっ！」

幼女二人は、きやきや、きやーつと声をあげる。

いつの間にかシロウの反対の腕もリコちゃんに抱きしめられていた。

幼女二人に無理やり引つ張られベンチから立たされてしまう。

男の子の流石なタクちゃんを見ると、幼児らしからぬシニカルな、アメリカンな仕草で肩を竦めている、どうやら彼には日常茶飯事らしい。

## 魔法少女

エローフプリンセス。

『魔法少女タフ&クール、二人はナイスガイッ!!』

アニメ第二シーズンから、人気の高いエロフ・エローフ姫を、第三の魔法少女として変身させた際の呼び名である。

小さい頃にそれを観ていたシロウ。

姫を外国語読みにしただけじゃないか！ と子供心に突っこみをいれた。

そして『ハートフルセクシーダイナマイツ!!』とは、変身してエローフプリンセスとなった彼女が放つ事のできる必殺技だ。

ちなみにエローフ姫が魔法少女になっても、コスチュームが変更されるだけで、見た目は可憐で美しい少女のままである。

エローフ姫が第三の魔法少女として変身するという前情報が発表されたときのことだ。

小さいお友達が一斉に泣き出し、その保護者と大きいお友達から、制作スタジオに問い合わせの電話が引つ切りなしに掛かってきたというのは有名な話だった。

普通に考え、ゴリマツチヨな魔法少女とか聖女とか女騎士とかって誰得ですか？

「エローフプリンセス!! エローフプリンセス!! エローフプリンセス!!」

小さい拳を握って足踏みして、ふるふると力んでいる幼女二人に熱心に応援された。シロウもふるふると泣きそうだ。

どうしようかと思っていると、太ももをポンポンと叩かれる。

タクちゃんが目を閉じて首を左右に振っていた。

この年齢でシロウよりも色々悟っていきそうな彼は将来女にモテそうだ。

「ハ……ハートフルウ……セクシイ……ダイナマイツ……」

力の鳴くような小さい声でボソボソと、胸の前で両手を小さく突き出す。

そして体を横にやや傾けて、親指と人差し指を合せてハートの形を作る。

それから、パチリつとウインク。

エローフプリンセスの必殺技『ハートフルセクシーダイナマイツ!!』の決めポーズだ。

シロウは自分が、こんな事をしていくという事実が酷く恥ずかしかった。

実際には可憐なエルフの美少女が頬を染めて、恥ずかしがりながらエローフプリンセスのモノマネをしているのだ。

保護者は「あらあらまあまあ」と微笑み、大きなお友達は大歓喜するだろう。

だが、無垢な幼女達には不評のようだ。

「えー、最初からして欲しいなあ……」

「必殺技の名前もよく聞こえなかったあ……」

「お姉さん、がんばって……」

「う、ううう……」

実はこの木森キモリのシロウ、エローププリンセスの必殺技『ハートフルセクシーダイナマイツ!!』を不完全ながらも真似する事ができるので。

まだ幼かった当時のシロウはアニメ的な演出のカッコよさに痺れて、一時期熱心に練習した。

だが、それをたまたま見かけた近所のお婆さんに。

『あら、シロちゃん。タコ踊りの練習かい？ うふふ可愛いわね』

褒められた後に頭を撫でられて美味しいお菓子を貰った……そしてシロウは練習を止めた。

お婆さんには今でも感謝をしている。

あれは若気の至り、人様には到底見せられるものではない、今思い出してもシロウの黒歴史だ。

「ハートフルウ……せ、セクシーダイナマイツ……」



「えー全然違うよう……」

「ハートフルセクシー……ダイナマイツツ」

「声が小さい〜!」

「ハ、ハートフリユ! ……ハートフルセクシー! ダイニヤマイツツ!!」

「啗んだ! 啗んだ! 可愛いっ!?!」

「う、ううううう——!!」

「お、お姉さんがんばって!」

シロウは幼児を相手にして、ふるふると涙を流した。

容赦ない幼児二人に何度も駄目出しをされた。

何度も幼児二人に応援を受けた。

何度もタクちゃんに慰められて、エルフ少女の細い体は、何度も何度もクルクルとまわる。

しかし体を動かし声を出していると不思議なもので、感じていた羞恥心が消えていった。

やがては熱心に練習をしていた頃の情熱が思い出され、動きと掛け声が洗練されたものへと変化していく。

「ハートフル! セクシー! ダイナマイツツ!!」

「がんばれ！ エローフプリンセス!!」

切れのある、キレキレな動きであった。

シロウは確かな手ごたえを感じていた。

イケる……今なら、この体ならイケる！ あの時は再現できなかったエローフプリン

セスの必殺技『ハートフルセクシーダイナマイツツ!!』をつ!!

シロウの穏やかな顔が、眉をキュと寄せた真剣な表情へと変わった。

幼児達の見ている前で、エルフ少女の体が、一流の体操選手のように美しく動きだす。

——くすくす、あははっ

笑い声が聞こえた気がしたが気にはならない。

クルリクルリとバレリーナのような華麗な片足での回転運動。

そのままの勢いを殺さず、飛びあがって、エビぞりジャンプをしゃらんと決めた。

——あはっ、あはははっ

声達がエルフ少女の元に集まってきた。

羽毛のような滞空時間。

手を大きく広げて宙を舞うように回転しながら、重さをまったく感じさせない軽やかな

な着地。

エルフ少女の豊かな胸だけがたゆんと揺れた。



そう、意図せずに『ハートフルセクシーダイナマイツツ!!』の前振りアクションが、まるで神舞の踊りのように場の神に呼びかけて、精霊を招いてしまったのだ。

シロウには分からない、ただ微笑んで、達成感にふるふる震えていた。

『エローププリンセスー!!』

何人もの声が同時に上がり、途端にドツという歓声と拍手が鳴った。

えっ……？

シロウの達成感は霧散する。

紫水晶の瞳は声の上があった公園の入り口に向いた。

ファンシーなイラストが描かれた幼稚園の送迎バスが止まっていた。

その窓に張りつくように、園児達がシロウを見つめて、きやーきやーとお猿さんのように歓声をあげていた。

パシャパシャ、という音が無数に聞こえた。

シロウは笑顔を浮かべ、体をかためたまま、ギギギ……と顔を向けた。

園児のお母さん達だろうか。

若い女性達が微笑ましいものを見る顔でシロウのことを眺めている。

通りすがりらしい若者達が、興奮した様子で拍手や歓声をあげ、スマホでパシャパシャしていた。

シロウはしっかりと撮影されていたのだ。

流石は国民的アニメ『魔法少女タフ&クール、二人はナイスガイツ!!』である。ファッショナブルでリア充そうな若者達にも大人気の模様だった。

シロウは、エローフプリンセスの必殺技『ハートフルセクシーダイナマイツ!!』を放つのに夢中になって、人が集まっている事にまったく気づかなかったのである。

「ああ、なるほど。この公園は幼稚園バスをまつための、乗り合い所でもあるのか」  
シロウは納得した。

「凄い、エローフプリンセス！ 可愛い！ 凄い!!」

「エローフプリンセス、綺麗！ 凄く綺麗だった!!」

「こっち向いてエローフプリンセス！ 写真撮らせてー!!」

「エローフプリンセス!! エローフプリンセス!! エローフプリンセス!!」

歓声が全然止まない……。

それどころか、この騒ぎを聞きつけた近所の人達が、小さい公園に集まってきているようだ。

シロウは、ギギギ……と、再び三人の幼児達に視線を向ける。

女の子二人は大興奮で怪音をあげていた。

男の子はシロウを同情するようなそんな顔だ。

シロウは無言で決めポーズの指ハートを解いた。

エローフプリンセスの必殺技『ハートフルセクシーダイナマイツ!!』をドヤ顔で決める少年（自分）……黒歴史どころではない悪夢だ。

「い、いやあああああああ———!!」

「あ、待ってよ、エローフプリンセスっ!!」

エルフの少女はベンチに置いていたコンビニ袋をつかむと、甲高い悲鳴をあげて、その場から逃げ出した。

追いかけてくる者を余裕で置いてきぼりにし、あつというまに消えたのだ。

その日、某動画サイトに『二次元から本物のエローフプリンセス現れる!?!』のタイトルで投稿された動画が、僅か数時間でミリオン再生数を達成した。

この動画が投稿されてしばらく後。

『魔法少女タフ&クール』ファンの大きなお友達の間で、片田舎の街が巡礼地になるのだが、パソコンどころか、今どきスマホすら持っていないシロウには知る由もない事である。

## 隣人

シロウは築三十年を超えるアパートへと戻ってきた。

素足である、錆びた階段を一步ずつべたべたとあがる。

ギシギシと軋む音に合わせて、シロウは悲し気な溜息をついた。

サンダルは公園に置いてきたままで、コンビ二袋の中ではペットボトルに潰されたオニギリが見え隠れしていた。

階段の途中で背後を振りかえる。

清々しいほどに田舎だと実感させる田園風景、草がまばらに生えた砂利道が見えた。

公園から追ってきた若者達からは、完全に逃げ切れたようだ。

その事には安堵する。

しかし、不可解な事が一つあった。

公園からアパートまでの距離を全力疾走してきたはずなのに、少しも息が乱れていないのだ。

シロウは思う、自分はここまで、本当に走ってきたのだろうか？

それは間違いないと思うのだが自信はない。

見た景色は緩やかに流れているのに目まぐるしく、高速道路を走る車内からの眺めのようだった。

疾走感は記憶に残っているが、風圧を感じなかった上に視界は良く見えていたから、余計に現実味がなくてテレビジョンでも観ていた気分である。

エルフの体のせいなのか答えがでない。

シロウは膝を上げて足裏を見てみた。

土で汚れているだけで傷らしきものはなにもない。

アパート付近の砂利道も駆けてきたのに、と……この体は明らかに普通ではないと気がついた。

遅まきながらに、とんでもない力を得たのかもと震えて恐怖が湧きあがる。

臆病なシロウには、優越感などというものは起きようもない。

夏だというのに寒気がした。

急いで部屋に戻ろうと視線をあげれば、階段先で誰かが待っていた。

半透明の煤けた衝立に隠れて姿は見えないが、大きい影は誰かは分かる。

人見知りの気があるシロウが、気兼ねなく挨拶できる知り合いの一人だ。

狭い階段を二人同時に通るには無理がある、そのために待っていてくれるのだらう。



シロウは慌てて階段をあがった。

「お、おはようございます、カナメさん」

「ああ、おはようシロ……ではないな、美人さん？」

通路にいたのは、見あげるような大男である。

一目見れば忘れられない特徴をもった容姿だ。

ワイシャツと黒のチノパンのシンプルな着こなし。

190cmを超える身長にしては細身だが、確かな体幹を感じさせる逞しい体である。

和風の鋭い顔つき、鼻の上にちよこんと乗る丸眼鏡は小さく見えて玩具めいている。

長い黒髪を首元でひつつめて、涼し気に背に流しているさまは大昔の侍のようだ。

そして、彼にはそれ以外にも見て分かる特徴があった。

赤銅色の肌、首元から見える鋼のような筋肉、そして額から生える二本の角。

鋭く尖り刃物じみた二本の角は明らかな異形の証。

オーガ種、和名は鬼。

彼の名は高瀬<sup>タカセ</sup>カナメ。

この鬼の青年は、シロウの隣の部屋の住人である。

カナメは訝しげにシロウを見つめると、メガネのブリッジを太い指でつまんで持ちあ

げる。

それは困ったときにでる彼の癖であった。

どうしたんだろう、と考えるシロウ。

エルフになつてもシロウはやはり鈍く、自分の今の姿のことは当然頭にはない。

しかし、鬼の青年の戸惑う様子は理解できた。

「あーすまない、私の知人にエルフはいないはずだが……君は私の事をどこで知つたんだ？」

エルフの少女は鬼の青年に質問された。

野生的な顔立ちには似合わぬ学者のような語り口調である。

それに違和感がないのは、彼が理知的な話し方を常日頃からしているからだろう。

カナメの思いもしない態度と発言である。

阿呆みたいにポカンツと口を開けていたシロウは、しばらくしてから自分がエルフの少女になつていてという事に気がついた。

「あ、あ、あ、あによ、ぼ、ぼくう!？」

「……………ふむっ？」

慌てすぎて舌がまわらなかつた。

喉元が痙攣したかのように引きつり上手く声がだせない。

気持ちばかりが先走って、言葉がまったくでてこない。

「あ、ひや、ぼ、あ、う!？」

「……ひよつとしたら、シロウか？」

天の救いは、説明をするべきカナメの口からであった。

シロウの頭は激しく上下に動かす、白銀色の絹髪が滝のように流れて宙をはねた。

「あ、あの、あの、これは、あのう!？」

「取り換えっ子病、そうだな？」

「またしても正解っ!？」

シロウは頭を激しく振る、上下上下だ。

膝に手をおき、カナメはゆっくりと腰をかがめた。

まるで大人が子供の相手をするかのように、エルフ少女と視線の高さを同じにする。

カナメは、シロウの足元を見て靴を履いてない事に気がついたが、特に指摘をしなかった。

「いいか？ 無理に喋らないでいいから、私から質問するからハイかハイエで首を振るだけでいい、できるなシロウ？」

エルフの少女はコクコクとうなずいた。

「病院には行ったのか？」

「ぶんぶんぶん」

「まだ行つてないのか……ということとは発病に気がついたのは今朝か？」

「(くくくくくく)」

「凄い、また正解だっ!? シロウはカナメの察しの良さに感動した。

「今から病院に行くのか？」

「ひゃ、ひゃい」

シロウは頭を縦に振りながら何とか声にだした。

カナメの穏やかな雰囲気、エルフの少女も少しずつ落ちつきを取り戻していく。

「肉体の変化以外で何か異常は感じるか？」

「あ、え、えつと、な、ないと思います……」

「ふむ、そうか、救急車の必要はないみたいだな」

「え、ええ、ええ、ええ」

シロウは事情が伝わった安心感に壊れた機械のようにカクカクとうなずく。

鬼の青年はエルフ少女の頭をポンポンと撫でる。

それからカナメは、少しだけ考え。

「よし分かった、病院へは私も付き合おう、少しだけ待っていてくれ車をだしてくる」

「え、えええ？」

「ん、一緒に行くのは嫌か？」

カナメの問い掛けに、とんでもないとシロウ。

迷惑かけるのが嫌だなという気持ちと、それ以上に助けてもらえるのが、有り難かった。

「で、でも、いいんですか？」

「いいさ、今日の予定は何もない。それにその様子だと、君は病院に行っても上手く説明できなそうだしな」

シロウを顔を赤く染めた。

鬼はそんなシロウに苦笑を浮かべる。

しかし彼からはシロウを馬鹿にする気配は微塵もない。

◇

カナメの運転する車で、シロウは離れた場所にある国立附属病院まで行く事になった。

近場の病院で済まそうとしていたシロウは、大事になっていく状況にビクビクとしていたのだが、カナメから説明をされた。

「取り換えっ子病は診察してもらえない病院が限られている、小さい病院だとたらい回しにされるだけだ」

到着した国立附属病院は平日でも混雑をみせていた。

異人種もちらほらと見かけるが、ほとんどが獣人種である。

エルフのような希少種はここでも珍しいのだろう。

自意識過剰ではなく、自分に集まる好奇の視線に、臆病者のシロウはひどく怯んだ。

「ううっ……」

鬼の青年の大きい背中に隠れるようにして、ぶるぶるとついて行くエルフの少女。

受付の手続きでは、シロウに代わってカナメが全てこなしてくれた。

緊張で上手く説明する事ができないシロウとしては、ありがたいやら情けないやらで自己嫌悪だ。

受付職員は希少種であるエルフの美少女を見て驚きの表情をしていた。

すぐに本人確認のための検査が行われた。

術式で検査した結果、提出した保険証に登録された生体魔力反応と、エルフとなったシロウの生体魔力反応との完全な一致が確認される。

もしも一致しなかったらどうしようと、シロウは無意味にビクついていた。

希少種のエルフ、しかもハイエルフらしき可能性もあるという事で、取り換えっ子病

であるとの判断が下され認定を受ける事になった。

安堵の溜息を漏らすシロウに、カナメは確認検査の理由を語る。

「取り換えつ子病の診察を受ける前に面倒な確認が必要なのは、仮病を騙る者が後を絶たないためなんだ。認定されると治療の間は完全に生活の保障がされ、治療完了後も国から支援補助金がでるからな」

それからの診察は比較的早く進んだ。

ただ最初は一人だったはずの医師が時間経つにつれ一人また一人と増えていく。

その事にシロウは、自分がモルモットにでもなってしまったかのような恐怖を覚えた。

保護者という形でカナメが傍に付き添い、医師の説明を補足する形でシロウにも分かりやすく伝えてくれた。

半日近い診察を終え医師団からの告げられた検査結果。

「現状では、エルフから人間種に戻るための術式を組むのは……非常に困難としか言いようがありません」

シロウは絶望した。

## 食べ放題

シロウ達が来ているのはバイキングレストランだった。

病院からの帰り、朝からまともにご飯を食べていなかったシロウは、カナメが運転する大型車の中で盛大にお腹を鳴らしてしまふ。

耳まで真つ赤にしてうつむくエルフの少女と呆気にとられる鬼の青年。

やがてカナメは、くくくつと笑いだすとシロウの頭をポンポンと撫でた。

そして、目に付いたショッピングモール内のお店に連れて行ってもらう事になったのだ。

お昼はすぎており夕飯には早すぎるといふ微妙な時間である。

広くクリンな店内は比較的すいていた。

テーブルから肉と野菜の焼ける香ばしい香りが漂ってくる。

ジツという油のはねる音が、シロウの空腹の胃袋をいやがうえでも刺激した。

店員は逞しい鬼と美しいエルフの凸凹希少種コンビに驚きの顔を見せる。

しかし、アルバイトとはいえ接客マニュアルが徹底されている日本の外食産業である、よけいな詮索などはせずに速やかにテーブルに案内してくれた。



「シロ、どちらがいい？」

「うー、うー……」

バイキングは焼き肉としゃぶしゃぶ、二種類から選ぶシステムであった。

カナメに聞かれたシロウはメニューを眺めて、うんうんと悩み中である。

コンビニの利用すためらうような極貧な生活をしていた。

そんなシロウにとって、このようなお店は次に来れるのはいつになるかは分からない、慎重に選ぶ必要があるのだ。

興奮にエルフ耳がびよびよこと上下に動く。

それをおかしそうに見ているカナメは、すでに注文は決めたらしくコップで水を飲んでいた。

シロウを焦らすような雰囲気はなく、カナメの姿は下の兄弟をみる兄のようだ。

「う、うーん」

「ゆつくり選べばいい、他のメニューはこっちで注文しておくから」

真剣な表情でメニューを見つめたまま頷くシロウ。

カナメは先にサイドメニューを注文しておくことにした。

それから十分後、テーブルに頼んだ料理が届いてから、シロウは悩みに悩み抜いてようやく焼き肉を選んだ。

「シロ、この肉もいい感じに焼けているから食べなさい」

カナメは焼けた肉をシロウの皿に移し、新しい肉と野菜を鉄板の上に乗せる。

シロウはカナメの言葉にコクコクと首を上下させる。

その目は皿の上に乗った焼けた食材しか見てなかった。

肉と油が焼ける何ともたまらない匂い、水分と煙が派手にあがるがコンロの換気装置に吸い込まれていく。

むぐうむぐう、とシロウは口の中一杯に肉を頬張って食べる事に一生懸命であった。

口内一杯の食べ物……美人ですら変顔になるはずだがシロウは美しいままである。

どうやら、エルフ種族のもつ真の美の前では適用されないようだ。

人間種の時より小さいエルフの体、そして女であるが、食欲は尽きる事なくいくらでも胃袋の中に入っていた。

むしろ普段よりも食欲が増しており、異常と言えるほどの餓えを感じていたのだ。

カナメが焼いてくれる肉をシロウは必死に食べ続ける。

焼く食材はカナメが全て持って来てくれた。

最初はフードバーへ食材を一緒に取りにいった。

カナメが手早く肉と野菜を確保して先にテーブルに戻り焼き始めても、シロウは戻ってこなかった。

心配しカナメがフードバーに戻ってみれば、空の皿を胸に抱えたエルフの少女がぼんやりとたたずんでいたのだ。

そのシロウの様子は、あれを取ろうか、これもいいな、ああ、でもそれもいいな……そんな心ここにあらず、であった。

シロウは対人が致命的に苦手だ。

しかし、それ以外は年よりもしつかりしている事をカナメは知っている。

醒めすぎていて若者特融のギラギラとしたものがなく、老成していると言ってもいい。

なので、年相応な……むしろ年よりも子供じみたその姿には微笑んでしまう。

とはいえ、らちがあかなそうだと判断して、鬼の青年は声をかけようとした。

するとエルフの少女がようやく取るものを決めたらしく動きを見せたのだ。

おっ？ ……とカナメは静かに見守る事にした。

シロウの柔和な顔がキュとした真剣な表情に変わる。

トングを手にすると、恐る恐るとフードバーの容器から食材をちよこんとつかみ、慎重に皿の上に乗せた。

ふうくと、エルフの少女は爆弾処理でもしたかのように額をぬぐい、本当に満足そうな深いため息をついたのだ。

ちんまり取りだしたそれはカレー用のトッピングであった。

「悩んだ結果が、福神漬じゃっ!」

カナメは素で突っ込んでしまった。

怒っているわけではないが、思わず大声になってしまった。

鬼の青年のデフォルトの鬼の形相に、シロウは悲鳴をあげた。

シロウに任せておくときりがなさそうなので、カナメが食材を取ってくる事に決めたのだ。

「シロ、追加の肉はいるか?」

「あ、も、もう大丈夫です」

鉄板にはまだ肉が残っていた。

お腹をさするシロウ、空腹はすっかりと消えていた。

信じられないほどの量を食べたのだ。

考えると何故あれほどの飢餓感があったのか、シロウ自身が不思議であった。

疑問を浮かべるシロウの様子に気づいたのか、カナメが理由を話してくれる。

「取り換えっ子病になった者は、大抵最初はそうなる」

「え、えつと……お腹が空くってことですか?」

「ああ、人間種から別の種族に肉体そのものが変化したんだ、かなりエネルギーを消費するのだろう、下手したら餓死する危険性もあるとか？」

「が、餓死……………!?!」

驚きに目を見開くシロウ。

エルフの少女の前で、カナメは鉄板に残った焼け焦げた肉を指でつまみ、口の中に放り込んで、ごりごりゴクン。

彼の口内には牙のように尖った八重歯が生えていた。

「まあ、あくまで噂だ。実際にはそうならない状態の時に発病するらしく、餓死した人間はいないという話だ」

「そ、そうなんですか」

「うん、どっちにしろ今生きているわけだし、私達には関係のないことだな」

確かにそうですねと、深く考えもせずに頷くシロウ。

「さてこれから先のことだが……………」

「は、はい……………!?!」

「色々あるが取りあえずは、服を何とかしたほうがいい、しばらくはエルフの……………女の体のままだろうからな」

カナメはTシャツとスウェット、そしてサンダル姿のシロウを見た。

野暮つたい格好だがエルフの美しさに曇りはない。

そういうフアツションですと言っても普通に通じそうである。

これがエルフの美形補正というものだろうか？

「ふ、服ですか？」

「ああ、服は私の手持ちの物がいくつかあるので、アパートに帰ったらそれを渡そう」  
「手持ち……ですか？」

「え、ああ……その、妹の服だ。たぶんサイズは合うと思う」

へえーカナメさんには妹さんがいるんだ？

そう、またしても深く考えないシロウ。

鬼の青年は咳払いをしてメガネのブリッジを指でつまんだ。

「問題は下着だな……こればかりは使用済みは嫌だろう。サイズもあるし買いに行く必要があるな……この後、いいか？」

「え、はい、分かりました」

「……本当に大丈夫かシロウ？」

「え、ええ、下着を買いに行くだけですよね？」

「ふむ……まあ、いいか」

カナメの煮え切らない態度を不思議に思うシロウ。

鬼の青年はエルフ少女の頭をポンポンと撫でた。

彼は前々からシロウの頭を撫でることが多い。

それを不快に感じないのは青年が頼れる大人で、自分が未熟な子供だからだろうか？  
今のシロウには答えを出せそうになかった。

## お買い物

エルフの少女は困惑しながらたたずんでいた。

そこは下着売り場という名の色鮮やかな花園。

紫水晶の色をもつ無垢な瞳は捉えてしまう——紐と布で構成されたスケスケの危険物を。

少女は頬を朱に染めると、その穢れなき身には早すぎる桃色の空間から立ち去ろうと後ずさった。

そんな瞬間の出来事である。

カツ！ カカカカツ！！ と床を叩く音が少女の背後で鳴った。

振りむく間もなく、人の域を超える速さを持った何者かの腕で、エルフの少女は背後から捕獲されてしまう。

その手際は、まるで一瞬の隙を狙う肉食獣であった。

「ひ、ひええええええ!!」

体を感じた衝撃と柔らかい感触。

予想もしない出来事にエルフの少女——シロウは甲高い悲鳴をあげた。



「だ、大丈夫です。お、落ち着いて、エルフのお嬢さん、私が貴女にお似合いの素敵なお品を選んで差しあげます！ ええ、私が選びますのでっ!?」

抱きついてきたのはお店の制服を着た、下着売り場の担当らしき若い女性店員だった。

興奮した様子の彼女は頬を染めてシロウを抱きしめたまま宣言する。

どう考えても、まず落ち着くのは彼女だろう。

女性店員のはいているパンプスからはうすく煙が出ていた。

高速移動の魔術——大学以上の学科で教わる高等技術を使用したらしい。

お客を確保して、逃がさないための魔術だろうか？

シロウの鼻が品のよい微かな香水の匂いを捉える。

背中に感じるのは女性特有の柔らかさであった。

シロウは今までの人生で、まったく触れる機会のなかった母以外の女の体に強く抱きしめられている。

普通ならば赤面してデレデレになっていただろう。

しかし実際には、あまりに突拍子のない女性店員の行動と発言が理解できず、恐怖のあまり涙目になっていた。

ぶるぶる震えるエルフの少女の姿は、畏にかかって怯える小動物であった。

「あー店員さん、かな？　ちよつとこの子の下着を見繕つて欲しいのですが」

助け船を出してくれたのは一連の漫才コントを呆れ顔で見っていたカナメである。

「可憐なエルフの少女だけをロックし、厳つい鬼の青年の姿は目に映つてなかつたのか、女性店員は「う、うおおう!」と女性らしからぬ声をあげてシロウの体を離してしまふ。

驚かれたカナメだが、その類の反応には慣れつこなのかまつたく動じない。

カナメは欲しい下着の種類と必要とする枚数や値段、またシロウが下着選びに不慣れな事などを女性店員に手早く伝えた。

鬼の青年の巖のような見た目に似合わぬ的確な注文に、また「お、おおう!」と驚きを見せる女性店員。

カナメの心強さに安堵して追加で涙するエルフの少女。

この二人は大丈夫なんだろうかと、少し不安になるカナメ。

「それじゃシロ、私は隣の雑貨屋で君に必要な生活用品を買ってくるから、細かい事は店員さんをお願いするといい」

「え、ええっ!?!　あの、カナメさんも一緒にっ!?!」

「おいおい、シロ。私のような大男が女の下着売り場をうろついていたら、営業妨害になつてしまうだろう?」

鬼の青年は苦笑いしてエルフの少女の頭をぼんぼんと撫でた。

シロウの願いもむなしく、カナメはその場から歩いていってしまふ。

去っていく飼い主をみつめるワンコ状態のシロウと、カナメに綺麗なお辞儀をする女性店員。

そして女性店員は振り返る、ニチャアというとても素敵な笑顔を浮かべて。

蜘蛛の糸を得たと思つたエルフの少女は再び恐怖のどん底へと叩き落されたのだ。

……そこからシロウの記憶は曖昧である。

試着室で服を脱がされ『や、やめて、これは脱がさないでっ!』『大丈夫! 先っぽ! 先っぽだけですから!』と男物のパンツまで無理やり剥ぎ取られて体のサイズを隅々まで計られた。

その間『素晴らしい! 何と美しい! 素晴らしい!』を連呼する女性店員。試着用の紙下着を履かされて、それから様々な種類の下着を試す事になった。

「取りあえず指定された下着はこのような物になりますね。着け心地に問題ないか試着をしてみましよう。え、ブラの付け方がわからない? さ、流石はエルフ!? これだけご立派なモノをお持ちなのに、今まで付けた事がないとは流石っ!」

感心しきりの女性店員からレクチャーを受け、質素なデザインの着下着を着けさせても

らった。

「ええ、ええ、とても素敵です！ とてもよくお似合いですよ!! あ、よろしかったらこちらの下着などもいかがですか？ 攻めのデザイン、彼氏さんも多分喜ばれると思いますよ？ え、違う？ 彼氏じゃない？ またまたく美女と野獣で素敵なカツプルですよ!!」

誤解され肩を軽く叩かれながら、フリルの付いたレース状の何かを勧められた。

「ぶらっ!!? ブラボツ!! これマジでやばい!! ぶはあ!?!」

赤くなった鼻を押さえた女性店員に酷く興奮をされ。

「ええ、そうですね、下着は問題ないと思いますが、お洋服のほうがちよつと……え、服は彼氏さんから借りる予定？ 熱々なんですわね? またまたく照れる姿も可愛らしい。市原ー! ちよつと来てーお客さまにお洋服を見てさしあげてー!!」

「はいはいく何です、うるさいですよ村瀬先輩? うおう生エルフだつ!!」

後輩の市原さんとやらから大量の服を渡されて着けさせてもらい。

「これも可愛い!! 嘘これも行けるの!! 先輩やばいつす! エルフさんレベル高すぎ! これマジやばですよ!」

「ええ、ええ、こんな田舎でエルフを見ることなんて本当に稀なのに、コーディネートまで出来るなんて!!」

「金田さーん！ 金田さん来てー!? 凄いの見えるよー!」

「ちよつと何よ市原? 店内で大声ださないで……うおう生エルフだどつ!」

さつきから、うおう生エルフってなんだろう、生キヤラメルの親戚だろうか?

ぼんやりと考えるシロウ、気がついたら何人も女性店員に囲まれていた。

彼女達の厳選されたコーディネートの中から多数決の結果がでる。

お洋服は淡いピンクのブラウスと白のパンツルックに決まったようだ。

それからシロウは髪の毛をいじられ薄く化粧までされてしまった。

今まで体験した事のない殺人的な女性密度。

もう何も言えず、ふるふる震えて微笑むだけのシロウは『お店の方は大丈夫なのかな』

と、人形状態になりながらも臆げに思ったのだ。

◇◇◇

シロウはカナメの大型車の助手席に座っていた。

所々の記憶が欠けている、ぼんやりと運転席のカナメを見上げると。

「ああ、よく似合ってるぞシロ」

目線は道路から離さず運転する鬼の青年。

頭をぼんぼんと撫でられ、エルフの少女は疲れた微笑みを浮かべた。

アパートに戻ったシロウは狭い玄関で足だけを使って器用に靴を脱ぐと、六畳一間に手に抱えた買い物袋を投げ捨てるように落とした。

買ったばかりの新品のローファーは乱雑に脱ぎ捨てたため引っくり返り、買い物袋からはいくつかの品物が乱暴な扱いに抗議するかのように転がりでてきた。

「つ、疲れたあ……」

それを目で追い、唇からこぼれ落ちるため息。

ローファーをきちんと並べ品物を袋の中に入れ直す。

カナメによると、必要な物を購入して店内に戻ると、女性店員に囲まれてチワワのようにぶるぶるしているシロウの姿があつたらしい。

走行中の車内で、そんな話をぼんやりと説明を聞いていたシロウだがブラウスの柔らかい手触りに気がつき、徐々に意識が戻つてくるとお金がいくら掛かったのか不安になつてきた。

慌てて財布を取りだすとお金は全く減つてなく、どういう事かと混乱する。

そんなシロウにカナメが。

『ああ、お金は立て替えておいた。支援金も出ると思うし、その時にでも払つてくれればいいよ』

シロウはカナメから買い物物のレシートを渡してもらつた。

そうしないと、この青年は有耶無耶にしてしまう恐れがあるからだ。

カナメは気前がいいというのか、お金に関しては比較的ルーズなところがある。

ちなみに掛かった金額は……シロウは貯金を下ろす必要があった。

鬼の青年だが、アパート前にシロウを降ろすと離れた場所にある駐車場に車を置きに行った。

部屋に戻ったらシロウが普段着として使えそうな服を持って来てくれるらしい。

もう着る事のない服なので貰ってもいいという話だ。

カナメには普段から世話になりっぱなしである。今回の件もあるしシロウは何らかのお礼がしたいと思った。

何がいかと考えていると部屋の隅に転がった荷物にシロウは気がつく。

買い物袋から転がり出ていたのは綺麗にラッピングされた小さな包みである。

確かお店を出る時に、最初に遭遇した女性店員の村瀬さんから『これはサービス品です、彼氏さんと楽しんでくださいね』と笑顔で手渡され、自分もぼんやり微笑みながら受け取ったのだ。

断じて彼氏ではないが、カナメと楽しめる？

ひよっとしてお礼になりそうな物だろうか？

シロウはそう考え包みを開けてみた。

……入っていたのは、紐と布で構成されたスケスケの危険物であった。

少女の左足の爪先が恐るべき柔軟さで綺麗に天井へと向いた。

腕を大きく振りかぶると迷う事なく、危険物を包みごと投擲した。

放物線も描かないレーザのような軌道、狙いたがわずゴミ箱にシュートだっ!!

投げきる美しい投球フォーム、エルフの少女の頬は羞恥で染まっていた。

「あの人……」

それ以上言葉が出ず沈黙……顔を手で押さえるとシロウは少しだけ考える。

——あれってどんな構造になっているのだろう……はっ!? な、なに考えているんだ僕は!?

——で、でも、好意で貰った物を捨てるなんて申し訳ないし、もつたいないお化けが出るよね?

いやいやでも……と、迷った末に未知への好奇心が勝った。

緊張しながらゴミ箱から視線を離し、さり気無く回収しようとしたところで、カツ

ンツ! と何かを叩く音が聞こえた。

びくんっ! と身を竦ませたシロウは慌てて部屋を見渡す。

しかし、変わったものはないにもなく、しばらく耳を澄ませてみたが何も聞こえない。

シロウの脳裏に浮かんだのは高速移動する女性店員の村瀬さんだった。



「ま、まさか危険物を捨てた事を感じして、ここまで追ってきた!?」  
ひいひい!? と小さい悲鳴がこぼれた。

それはシロウにとって、あり得なくも恐ろしい想像であった。  
再びの静寂……シロウは息を殺す。

「き、気のせいなのかな……?」

……カツンツ……ガツッ! ガツッ! ガツッ!

と思った途端にすぐ近くで連続して音が鳴った。

「う、うわああああ!?!」

ラップ現象に似た音にシロウは大声を上げてしまう。

「え、ええっ……窓から……外から聞こえてくる!?!」

シロウは音の発生源を探り当てる。

大きい虫が窓ガラスにぶつかるとなるような音であった。

怯えながらも安物の窓カーテンを引いて抱きしめ、壁に背をつけ逃げ腰で窓の外を確かめた。

「……あ、あれ、いない?」

少しだけ迷い、ゆっくりと窓ガラスを開けてみたがやはり何もいないようだ。

安堵して、空を見上げてみれば日はだいぶ落ちて薄暗くなってきた。

それでもシロウの目は、いつもと違い周囲の景色を細部まで視認する事ができた。

……………こつ ……………の ……………さ

エルフの長い耳が意識せずに動いた。

闇夜すら見通す紫の瞳は確かに捉える。

鈴のような羽音と声、そして正面から猛スピードで突っ込んでくる小さい影。

『こんにやろー！ いい加減開きやがれなのさー！！』

「わあっ！！」

シロウは頭を抱え尻餅をついて畳の上に転がった。

髪の毛が風圧で跳ねあがる、間一髪で頭上を何かが高速で通り抜けていく。

一瞬見えたそれは、小さな人であった。

『ぎゃああああああああっつっつっつっ！？』

びたああああああんっ！！

六畳の部屋を横断し、玄関の扉に凄まじい勢いでぶつかつた。

甲高い叫び声と、びりびりとした振動が生まれて、埃が舞い上がる。

そして針の落ちる音さえ聞こえそうな静寂がおとずれた。

しばらく様子を見ていたが反応がまったくない……死んだのだろうか？

玄関の段差に入り込んだのか姿は見えなかつた。

涙目のシロウは喉を鳴らし、逃げちやだめだ！ と覚悟を決めて表情をキツと引き締めた。

どちらにしろ逃げ場のない自宅である。

虫なら外に捨てないと安心して寝る事もできない。

シロウは、よつんばいでビクビクしながら玄関に近づいていく。

『う、うゝん、や、やるじゃないのさゝ』

「!？」

驚いたシロウの体が立ち上がって大きく後ろに移動した。

身軽なネコのように、一瞬で部屋の反対側の壁まで飛んだのだ。

スーハースーハーと深呼吸をする、見えたのは仰向けに寝転ぶ小さい影だった。

そこにいたのは透明の羽をもつ美しい妖精。

可憐な少女の姿をした悪戯妖精ティンカーベルが目を回して大の字で転がっていたのだ。

## 風の精霊

玄関の扉に万歳じばくアタックを敢行した小さな妖精はすぐに目を覚ました。

床に倒れたままシロウを見あげると這いずりはじめる妖精。

ずりっ……ずりっ……ずりりっ……。

まるで半身を叩き潰されたゴキブリのようであった。

「ひいひいひいひいひい!？」

夢に出てきそうな不気味な動きにエルフの少女は甲高い悲鳴をあげてしまう。

怯えるシロウに手を伸ばして、ふるふるると震えながらゴキブ……妖精は言う。

『エ、エルフさん、アタシ、力使いすぎて……死にそうナンデス。カ、カロリー……ハチ

……ハチミツ酒を、プリーズなのさあ……』

「……はい?？」

木森家キモリにはハチミツ酒などと言う洒落た物は存在しない。

代わりになるかなとシロウは砂糖水を作ってみるのであった。

彼女は風精霊と名乗った。

精霊とは高い魔術素養と資質がないと視認できない存在である。

写真には写らず機械的な手段では捉える事ができないのだ。

そのため常人が精霊の存在を知る手段は、精霊が力を使用した際に生じる魔力の光か、視える者の手によってスケッチされた姿絵のみであった。

『くふうく生き返るー!! まずううーい! もう一杯さあ!! ……あ、すいません、今度はソルトも少しつまんで入れてね?』

その精霊は紙コップを両手で抱えて、折りたたみ机の上にぺちやりと女の子座りをしていた。

彼女は生ビールを飲みきった中年サラリーマンのように、ぷはあーと歓喜の声をあげ空になった紙コップをシロウに差し出す。

先ほどまでの死にそうな雰囲気はどこにやらだ。

それどころか彼女は、自らの体と同じ大きさの紙コップの中身を全て飲み干してしまった。

「うんつと、砂糖水は美味しくなかったのかな?」

『美味しかったさくハチミツ酒には及ばないけど、これはこれで中々美味なのさく!』

「あ、そうなんだ。てつきり不味かったのかと思って」

キョトンとした表情になる精霊。

『ん？ ひよつとしてエルフさんは、不味いもう一杯！ のネタしらない？』

「え……？ ごめん、僕は流行とか詳しくないから」

『なんだなんだエルフさん！ ナウでヤングなガールたるもの、流行には敏感にならないさやダメダメなのさ〜!!』

シロウも何度か聞いた事のある、かつての流行語と言う名の死語だった。

職場の店長がたまに使っている。

精霊はニツと笑顔になると腰に両手を当て、えっへんというポーズ。

そしてケラケラと笑い出した……危ない薬でも投与されているようなテンションだ。

シロウは六畳間の小さい台所で注文通りの塩を少し入れて砂糖水を作った。

『アタシの五感をビンビン刺激するいい匂いがしたんで来てみたら、契約できる年なの  
にまだ精霊持ちじゃないエルフさんがいるし！ うんむ、アタシってば本当に運がいい  
ラッキガールさね!!』

「そ、そうですか、お代わりどうぞ」

シロウは砂糖水入りの紙コップを妖精の前に置いた。

『お、キタキター！ シュガーの雑な甘味とソルトのほのかな塩味、かつー、こーれがまた美味いんだなあ!!』

B級グルメ漫画に出てきそうな安っぽいキャラ発言だった。

二杯目は一気飲みはしないらしく味わうようにコクコクと飲んでいる。大きき故にコップに抱きつくようなグビ飲みになる。

可憐な見た目に反して、おっとと、ぷはーなどと一ツリアクションがおっさんじみていた。

シロウとしては精霊の体積に匹敵しそうな水が何処に消えていくのかが不思議で仕方ない。

「あの……僕は木森シロウって言うんだけど、君の名前は？」

『キモ……シロウ？』

「シロウでいいです」

シロウを見上げながら小さな手でごしごしと口元を拭う精霊。

中学時代の『キモイシロウ』のあだ名を思い出して、シロウは悲しみをおぼえながら消極的に訂正した。

『ラジャリコなのさ！ アタシの名前はシエルル！ 風精霊のシエルル様なのさ！ よろしくねシロシロ!!』

「シロシロ……う、うん。よろしく、そのシエルル？」

『おーいえすう。名乗り合ったという事は、若い二人は合意したものと見なして、早速婚前交渉を……』

「……………?」

抱えていたコップを机に置くシエルル。

姿勢をただし咳払いをすると、サツと両拳を突き上げた。

『シロシロ! アタシと契約してエレメンタルマスターになるのさっ!!』

「エ……エレメンタル、マスター?」

突然の宣言にエルフの少女は目をパチクリと開いた。

『イエース、イエース! エルフと精霊の友情ワンセットで君も明日からエレメンタル

マスターさねっ!!』

エレメンタルマスター 精霊の支配者——精霊と契約して使役する術者の事だ。

詳しい事はシロウには分からないが、学校で受けた授業などで精霊の支配者とは高度な術者であるという事だけは知っていた。

魔術の才能や魔力量だけでは契約はできず、精霊との相性が何よりも重要視される。

それゆえに彼らに最も性質の近いエルフが適していると言われていた。

「え!? そ、その、無理です!?!」

『ええっ!?! ど、ど、ど、どうして!?! どうしてさっ!?!』

「……………どうしてと言われましても」

シロウは悩み考えながら断った理由を話す事にした。



「えっと、実は僕は取り換えっ子なので本物のエルフではないんです」

『本物じゃない？ う〜！ そんなこと言ってアタシと契約したくないのねっ?!』

「あ、いや、そうじゃなくて……そのうち人間に戻る予定なので、精霊と契約なんて恐れ多くて無理です」

『シロシロはどこからどう見ても本物のエルフさねっ?! ハッ?! 本当は契約する気なんてこれっぽっちもなくアタシの名前からだだけが目的だったのね!! うわあああんー！

シロシロの精霊たらし！ ひ、酷いのさ〜!!』

「え、ええ!? な、何でそうなるの!？」

身振り手振りで何とか説得しようとするシロウと、話をまともに聞いてないどころか不味い感じで捏造していくシエルル。

焦りを覚えるも語呂が豊富ではないシロウの口は直ぐに止まってしまふ。

『うう、うううー!!』

「あー、うー、うー」

断られたシエルルは涙目になってぶるぶると震えていた。

シロウに至っては、あーうーとすでに言語の体をなしていない。

今にも泣き出しそうなシエルルの様子にどうしようかとただ狼狽えるばかりだ。

人が悲しんだり苦しんだりする姿が凄まじく苦手なシロウは罪悪感に駆られて、小さ

な精霊を慰めるように手を差しだす。

シエルルはシロウの指をつかむと、子供のように胸元でぎゅっと抱きしめる。音がした……り——ん、という羽音。

お互いの体の熱と魔力がゆっくりと触れ合った。

緩やかに二人の魔力が干渉して、交じりあつて淡い光を生みだした。

薄暗くなった部屋の中を照らすように広がっていく。

デジャブ、というものだろうか？ シロウは不思議な懐かしさを覚えた。

指にすがりつくシエルルを見ていると、幼い頃から知っているような気持ちになるのだ。

風精霊はシロウの魔力に触れて安心した様子で微笑んでいる。

シロウもいつのまにか焦りも不安も忘れ静かに微笑んでいた。

『エルフのシロシロ、アタシと契約してくださいなのさ』

再び、り——んっという羽音。

精霊の真剣な眼差しと鈴のような透明な声。

二本の指に抱きつき真っ直ぐに見上げる風精霊のシエルルに、ハイエルフの少女はうなずき真摯な気持ちで答えた。

「ごめんなさい、今回はご縁がなかったという事で……」

『なんでさっ!?』

「ひえっ!?!」

怒鳴られた!?

シエルルは指を離して背中中の羽をブンッと震わせると、瞬間移動じみた動きでシロウの肩に飛び乗った。

長い耳を小さな手が、ぎゅむっとつかむ。

エルフの少女はあまりのくすぐったさに、あっあつと身悶えてしまう。

シロウは初めて知った、エルフ耳は非常に敏感らしい。

『こういうノリの場合には普通はオツケーさねっ!? 俺の可愛い精霊は君に決めたっ!!』

一生離さないぜ可愛い子ちゃん!! じゃないのさっ!?!』

「だ、だって、エレメンタルマスタ精霊の支配者って、凄い力のある術者でしょう!?! いくらなんでもボクには無理だよ!?!」

『何でさ! 何でさ! 何でなんさあー!!』

「あつ! み、耳を引つ張らないで嘯まないで吸わないで!! ああ……も、もう困ったなあ」

シロウが回らない頭を悩ましていると、玄関からコンコンと静かなノック音が聞こえた。

「シロいるか？ 着れそうな物を見繕ってきたのだが、今、ドアを開けても大丈夫かな？」

「え、カナメさん？ あ……ちよつ、ちよつと待つてください！」

「ん？ ああ、待っているから、大丈夫になったら言ってくれ」

「は、はい、すいません!!」

シロウは慌ててシエルルを見た。

精霊は揺れる肩の上で、おつとと危ねい!? などとのんきな声を出しながらサーファーのようにバランスを取っていた。

「ど、どうしようシエルル、カナメさん来ちゃった!」

『うにゆ？ カナメン？ 何がどうしたなのさ?』

「あ、あの、シエルルのこと、カ、カナメさんになんて言えいいのかな?」

『お、おう……?』

「ああ、どうしよう!?! どうしよう!?!」

シロウは白銀の頭を両手でワシヤワシヤとかいた。

カナメに状況を話せばいいだけだが、説明しにくい事になると途端にパニックになるのがシロウのシロウたる所以である。

『シロシロ、シロシロ』

「な、なにシエルル!？」

『問題はないさ〜』

「え、え、ど、どうして!？」

『だって普通の人にはアタシを見るのができないからネ〜』

「……………あつ!？」

シロウは鬼種であるカナメが何の仕事をしているのか詳しくは知らない。

しかし精霊を視れる高度な術者であるとは聞いた事がなく、シエルルを認識する事はできないはずだ。

シロウは説明を後回しにできる事に安堵のため息をついた。

言いだすタイミングを確実に失ういつものパターンである。

「い、今開けますねー」

「ああ、分かった」

シロウ狭い部屋を横断して玄関まで行く。

シエルルがエルフ耳を片手でつかみひつついてくる。

ドアノブをつかむとろくに確認もせず、外開きの扉を思いつき開くシロウ。

「す、すみません、お待たせしました」

「こちらこそ、くつろいできるところをすまんな、取り敢えず普段着として着れそうな物を

持ってきた」

カナメはシロウの行動を予想して、扉に当たらぬよう玄関の脇によけていた。

そして片目をつむり、シロウに片手で持つている手提げ袋を持ち上げて見せる。

頭を下げ恐縮しながらシロウは差し出された袋を受け取った。

「こ、こんな一杯!?! カナメさん、本当にありがとうございます」

「いや、大した事ではないさ。サイズだが合わなそうなら言ってくれ。着れる物が少なくて生活に支障がでるようなら、また買ひ物が必要になるしな」

「そ、それは……ちよつと」

シロウはつい数時間前の悲劇を思い出して途端に情けない顔になる。

カナメは笑いながら手をシロウの頭上に差し伸べて……途中で止めた。

「あの、カナメさん?」

中途半端に出された手を疑問に思うシロウ。

190センチを超える巨漢の困惑したような雰囲気。

やがてグローブのような大きい手が何もせずに戻された。

「あ……何でもなし。私はこれで失礼するよ。明日は約束通りに君の職場に一緒に行つて取り替えっ子病の説明をするから、迎えに行くまでは部屋で待っていてくれ」

「はい、なにからなにまで色々と迷惑かけてすいません。本当に助かります」

「いいさ、知らない仲でもないし。それにシロ、君はもう少し他人に甘える事を覚えたいほうがいい」

「え、は、はい？」

カナメの発言にシロウは戸惑ってしまふ。

シロウとしては母が亡くなってからというもの、他人に頼り過ぎてると感じる事が多いのだが、カナメからは違って見えるらしい。

「それじゃシロ、また明日。戸締りはしつかりとな」

「あ、はい、おやすみなさいカナメさん」

片手をあげて去っていくカナメ。

シロウはお辞儀をして見送り、部屋に戻ると受け取った荷物を買物袋の横にそつとおろした。

『ねえ、ねえ、シロシロ』

「うん、なにシエルル？」

カナメの前では一言も喋らず、黙っていたシエルルに話しかけられる。

『あの鬼さんは一体何者なのさ？』

「え、隣に住んでいる高瀬タカセカナメさん。とても親切な人なんだ」

『……怪しい』

「えっ?」

腕を組みB級探偵漫画の安いキャラのように、うんうんと唸りだすシエルル。

「怪しいって……カナメさんが?」

『そうなのさ、だってあのカナメン、アタシの事に気づいていたみたい?』

「ええ……………!?!」

『はつきり見えていたかは分からないけど。それと、アタシの突進に耐えられるこのアパートも何かおかしいさね?』

カナメさんが怪しくてアパートがおかしい?

シエルルの言っている事はシロウには今一つ理解できなかつた。

『シロシロも、エルフならもつと自覚したほうがいいさ。渡る世間は鬼ばかり、契約もしてないエルフは食い物にされるだけさね?』

「……………」

大昔、エルフの希少性と高い魔力から、契約前の力のない子供がさらわれ、奴隷にされ高値で売り買いされていた時代があつたらしい。

そのためにエルフは自分達だけの独自のコミュニティを形成し、他の種族との関わりを減らして排他的になつたのだとか。

今の時代にそんな事と笑っていられるほどシロウも能天気ではなかつた。



母親が亡くなった際、親戚と名乗る男に騙され、遺産を奪われる経験をしているのだから。

「……気を付けるよ。でもカナメさんは良い人だよ?」

『うーん、カナメンからは悪い感じはしなかったけど……。う、うん!! シロシロは身の安全のためにも、アタシと今すぐ契約したほうがいいと思うのさっ!?!』

エルフ耳を小さい手で引つ張り、すかさず自分をアピールしてくる風精霊。  
くすぐったさに再び身悶えする。

シロウはスーパードでハチミツ酒とやらを買ってきて、契約の話は有耶無耶にしようと考えてるのであった。

## 家族

風精霊のシエルルに、なし崩し的に居候され一緒に生活する事になった。

『アタシは1／144のロボロボと同等サイズだからスペースは取らないのさっ！』

よく分からない事を小さな胸をはって誇らしげに語られる。

シロウとしては慣れぬエルフ、そして女の身だ。

かたわらに精霊がいる事は不安であり同時に心強くもあつた。

翌日、朝の習慣で点けたテレビジョンから流れてくるのは軽快なBGMとアニメ声。

——私の名は魔法少女エローフプリンセス！

——オイタをする悪い子はお尻をペンペンですよ！！

——ギャギャ、エ、エローフプリンセスだどう!?

シロウは朝食の支度を手早く済ましていた。

目玉焼きとトースト、そして牛乳だけという質素なものだ。

ただ今日の朝食は二人分、いつ以来だろうとシロウはわずかな感慨にふける。

折りたたみ机の上に出上がった料理を並べていると、テレビジョンから『魔法少女

「タフ&クール」が流れていた。

「新シリーズか……確か、10年以上は続いてるんだっけ。シエルル、朝ごはんの準備が出来たよー」

『あ、もうちよつと、もうちよつこつと待って！ 今ちよつど良いところなのさ!!』  
「もう、早く食べないと冷めちゃうよ」

空中できちんと正座してアニメを観ている風精霊。

拳を握って子供のようになんか夢中になっている姿に何故か和んでしまう。

不意に感じるデジャブ、このやり取りはどこかでしたような気がした。

『エローフプリンセス！ エロプリ！ まるでシロシロみたいなのさっ!!』

「あ、ははは……」

シロウのエルフ耳が情けなくも垂れさがる。

公園での園児達との一幕と、新たな黒歴史を思い出してしまったのだ。

視線をテレビジョンに戻した。

シリーズ皆勤賞のエローフプリンセスが映っている。

彼女が新しいタフガイとクールガイの魔法少女のピンチを救っているとあるところだ。

初ピンチからのエローフプリンセスの初登場はタフ&クールの伝統である。

久しぶりに興味を覚えたシロウも、シエルルの横に腰を下ろして綺麗な正座をした。

——エローフプリンセス？ 何にしてもサンキューだぜ!!

——フ……感謝するぞエローフプリンセスとやら。フ……。

相変わらず、マツチョなタフとクルルの新魔法少女。

シロウが昔みた無印のタフ&クルルに比べると今風のキャラクターになっていて、コスチュームも随分と様変わりしていた。

頭には警察官のような帽子を被り上半身は皮製のチョッキのみ。

下半身にはピッチリとしたズボンとブーツで、衣服にはチェーンや鋲が無数に打ち込まれており初期の頃と比べると色々ぎりぎりなデザインである。

魔法少女というより世紀末の荒野で戦っていきそうな雰囲気、PTAに真正面から喧嘩を売っているとしか思えない格好だ。

その二人に比べると、デザイナーの気合いの入りようが明らかに違うのがエローフプリンセスだった。

天女の羽衣のような布を幾層にも重ね合せた、彼女の魅力を引き出すために計算し尽くされた清楚で可憐な魔法少女コスチューム。

歩くだけでチラリしそうなミニスカートだが、パンチラはだけは絶対許さないという制作陣の熱意と情熱が画面越しにヒシヒシと伝わってくる。

——私が戦いの手本をみせます！ 二人とも合わせて!!

——お〃お〃お!!

エローフプリンセスのソプラノの声に応える、二人の新米魔法少女の野太い声。そして世紀末的な怪鳥の叫び。

今更だが本当にいいのだろうか、こんなものを日朝の時間帯に子供向け番組として放送して。

しかし、それを置いてもアニメ的なアクション演出は相変わらず素晴らしかった。

子供向けの勧善懲悪の分かりやすいストーリーと、大きなお友達向けの萌と裏設定に保護者向けの人間ドラマ、幅広い層に人気なものも分かるというものだ。

久しぶりに観るシロウもシエルと一緒にいつの間にか引き込まれていった。

『がんばれ! がんばれ! エローフプリンセスなのさ!!』

「あ、ああ!! タフガイ危ないっ! 突っ込みすぎだよっ!」

エルフの少女と風の精霊が前のめりで熱心に見入る。

いつしか二人は、わーきゃーと興奮しながら応援していた。

二人の魔力が重なり合い、場の意思持たぬ精霊達が光を放って踊りだす。

芸術家が見ていたら、それだけで絵が描けそうな光景であった。

テレビジョンの中の物語は佳境に入り、やがて三人の魔法少女の必殺技が街の平和を

乱すガリガリ獣に直撃——

——番組の途中ですが、緊急速報です。

『ふえっ、な、なんなのさっ!』

「あ、あれ……?」

女性アナウンサーの声。

突然画面が切り替わり仲良く声をあげる二人。

——本日未明、××県××市××町において魔獣の出現を確認しました。

——警察および関係各所の迅速な対応により、幸い犠牲者は出なかつた模様です。

——生き残りの魔獣が潜んでいる可能性も考えられます。

——××県××市××町付近の方、また向かわれる方は十分にご注意ください。

——この件に関して、テロ組織との関連も考えられるため現在調査中……。

——繰り返しします……。

シロウは繰り返し返されるニュースを呆然と聞いていた。

意識が……自分という存在が、霧がかつたように曖昧になる。

魔獣という単語を聞いた瞬間だった。

記憶の淵に何かが引つ掛かる、でも考えてはいけけない、思考してはいけけない。

自分におおい被さる黒い影が見える、でも思い出してはいけけない。

顔にかかる赤いもの、動けなくなるから、聞いてはいけけない、見てはいけけない。

駄目……怖い、怖いよ、恐怖で頭がおかしくなりそうだ。

『シロシロ大丈夫さねっ!?!』

「!?!」

呼びかける声に我に返る。

気がつくと、シエルルがシロウの頬を撫で叩いていた。

『シロシロ、何か悲しいことがあったの?』

「え、いや、そんなことないはずだけど、あれ、涙……?」

シロウは涙をこぼしていた。

理由もわからず、ただ心が苦しくて涙を流していた。

それを小さなシエルルが両手で一生懸命拭ってくれていたのだ。

シエルルを優しくどかすと自分の指で涙をぬぐう。

いつものフラッシュバックであった。

シロウは思う、僕がこんな風になってしまったのはいつからだろうと。

——くらえ!! マッスルカニバールウ!!

——ハートフルセクシィダイナマイツツ!!

画面が切り替わり魔法少女達の必殺技が炸裂した。

そして街に平和が戻り、のどやかにお話が進みエンディングが流れる。

シロウは無感動にテレビジョンの中で動くキャラクター達を眺めた。  
このアニメを観なくなったのはいつからだろう。

正義の味方なんて存在しないと気づいてしまったのは……いつからだろう？  
そう、ぼんやり考えるのであった。

約束の時間にカナメが迎えに来てくれた。

待たしては悪いと出かけるための確認を急いでするシロウ。

「それじゃシエルル、カナメさんと出かけてくるから留守番はお願いね」  
『あいあい、ラジャリコなのさ！』

「お腹が空いたら、台所にサンドイッチ置いてあるからそれ食べてね」  
『おお、砂糖水は!?!』

「ペットボトルで作ってあるから、コップに注いで飲んでね」  
『わーい、やったなのさー!!』

空中で、やったやったと不思議なダンスを踊るシエルル。  
シロウはそのやり取りにまたデジャブを感じた。

「DVDデッキの使い方は大丈夫?」

『ういー! 再生、停止、選択、取りだし、バッチグで大丈夫なのさー!』



シロウはテレビジョンを見る。

横にはDVDデッキと初代『魔法少女タフ&クール』のDVDセットが置いてあった。1シーズンと2シーズンのフルセットである。

その後、朝アニメにハマってしまい、続きを観たい観たいと無茶をいうシエルルに、旧作ならばとしまっておいたDVDを引っ張り出したのだ。

それは仕事で家を空けがちであった母が、一人留守番をする幼いシロウのために買ってくれた……今となっては形見のような思い出の品である。

デッキは一年以上は使用していなかったが電源を入れるとしっかりと起動した。

流石は我らが大日本帝国製だとシロウは大いに満足するが、残念なことに中身は全て海外製部品である。

DVDがあつて助かったとシロウは思った。

精霊とは人が当たり前と考える常識が通じない存在だ。

シエルルと一緒にいて行きたいとごねたら、どんなトラブルが起きるか分かったものではない。

幸か不幸か少し生活しただけで、シエルルのトラブルメーカー的な資質を十二分に実感できてしまったシロウ。

外に一緒に出かけるのは、もっとお互いの事を知る必要があるだろう。

言っておく事は大丈夫かなとシロウは靴を履いた。

そして玄関のドアノブをつかんだ時だった。

『シロシロー!!』

「うん、なにシエルル？」

シエルルの呼びかけにシロウは振り向いた。

『いってらっしゃいなのだ!!』

「あ……………」

空中で両拳をあげ笑っているシエルル。

シロウは呆気にとられた。

それはひどく久しぶりで、どうしようもなく懂れていたものだったから。

あまりにもあっさりと手に入れてしまい戸惑うシロウ。

やがて心の底からじんわりとした温かさが、嬉しさが込み上げてくる。

シエルルとのやり取りに懐かしさを覚えた理由もわかった。

だから……………。

「いってきます、シエルル」

シロウは家族に言うように、いってきますをしたのだ。

## アンテイク

重厚な色合いもつ木造の建築物、そこに店を構えるドワーフ工房カネダ。

その隣には同じく木造建築だが洒落た作りの喫茶店カネダがあつた。

名前から察せられる通り、この二つは同じ経営者の店であるが、たまにしか注文が入らない工房より喫茶店のほうが明らかに繁盛をしていた。

喫茶店カネダではランチタイムの時間を迎え、いつも以上の賑わいを見せている。

休日である、元から客の入りは悪くはないが、そうなる理由は一目瞭然であつた。

「すいません〜エルフのお姉さん。こっちも注文お願いしますす〜!!」

「あ、は、はい! た、ただいま!」

客寄せとなつていたのは名指しされて、ぴよこんと飛びあがるエルフの少女。

オープンカフェとなつている店内は路面から店の様子がよく見え、この土地では珍しい異人種……エルフの姿は人を寄せるに十分すぎる効果があつた。

エルフの少女は同年代と思える少女達の元に、慌てて注文を取りに向かう。

光に輝く白銀色の髪、彼女はスカートの長い古風な制服——メイド服を着けていた。

エルフの少女が歩くと、それだけでシックな店内が幻想的な雰囲気へと様変わりす

る。

「カレーピラフとジンジャーエールと本日のお勧めケーキで」

「私は、シーフードスパゲティとアップルティ、それと詰め合わせフルーツ」

「えっ」と、私は……」

「は、はい、ちゆ、注文を繰り返しますね、カレーピラフと……」

少女達のバラバラな注文、オーダーシートに記入していたエルフの少女は硬い表情で確認する。

緊張し何度も言葉をつつかえさせ、いかにも慣れてなさそうな接客であった。

しかし、その一生懸命な様子から悪い印象を受ける者は少ないだろう。

周りで見ていた客達はハラハラしながらも密かに応援していた。

やがてエルフの少女はオーダーの確認を終えると顔をあげた。

途端に人形のように硬質だった表情が一転する。

彼女は長い耳を緩やかに動かし、ふんわりとした優しい表情を浮かべたのだ。

その変わりよう、妖精の微笑みに少女達全員が呆気にとられて見惚れてしまう。

彼女達がこのお店に入ったのは、外からエルフの姿が見えたからだ。

多くの異人種の中でも最も美人が多いとされるエルフ種。

テレビジョンやネットのお陰で一昔前よりは露出が増えたが、それでも自分達のこ

ミニニティから出てこないエルフを見かける事は非常に珍しい。

動画や画像だけが出来る事でエルフの神秘性は逆に増していったのだ。

そんなエルフ、少女達は学校での話のネタにでも……その程度の軽い気持ちだった。

しかし長い耳をびよこびよこさせる生エルフの破壊力は、彼女達の予想を遥かに超えていた。

——え、な、なに、この可愛い生き物は……お、お持ち帰りしたいっ!?

少女達全員がうつむいて頬を染めてしまう。

ジツと様子を見守っていた客達も、仕事を一つやりとげて嬉しそうなエルフの姿に微笑みを浮かべる。

彼ら脳内には、田舎から出てきたエルフの少女が慣れぬ生活に戸惑い苦労しながらも、一生懸命に頑張っているというハートフルな物語が生まれているに違いない。

「良子さん、オ、オーダー入りますっ!」

「は、はい、シロちゃん。あと、これ出来たから、三番テーブルにお願いね」

「は、はい、分かりました!!」

エルフの少女は喫茶店カネダの店長である良子から料理を渡される。

スカートの裾に足を取られないよう、自然と小幅になる不器用な歩き方で料理を届けに行く。

その姿を店内の客達は、再びハラハラしながらも温かい心とまなざしで見守る。切れる事のない名指しの注文に、エルフの少女は引きつった硬い笑顔を浮かべた。それが第三者からは俗世離れた神秘的な美しさと見えるのだから、エルフの美とは才能である。

そんなエルフの少女シロウは、おのれのメイド姿に悶絶していた。そしてこうなった経緯を思い出しながら、慣れぬ接客仕事をしていたのだ。



朝も過ぎた時間である、シロウとカナメが向かったのは、シロウの職場であるドワーフ工房カナメダであった。

店の店主でありシロウの雇い主でもある金田源五郎に、取り替えつ子病にかかってしまった事と、通院でしばらく休む事を伝えるためである。

様々な工作機械が置かれているが、整頓されている綺麗で明るい店内。

三人は木製の分厚い丸テーブルを囲んで座っていた。

「いやあ驚いたなあ、シロウ君がエルフに……しかもこんな別嬪な娘さんになっちゃうとはなあ」

「あはは……僕も驚いてます」

カナメが説明をしてくれたのでシロウの事情は源五郎へスムーズに伝わった。

このドワーフ工房カナダは古い魔道具の整備や修理などを専門とするアンティーク工房だ。

ドワーフ種族の仲でもドワーフの名を冠した看板を掲げられるのは、長老会で認められた腕利きのみである。

その金田源五郎はドワーフ、妻の良子は人間の異種族夫婦であった。

シロウの母と金田夫妻は古い友人らしく、天涯孤独の身となったシロウの保証人となってくれた。

また詐欺に騙されて一文無しとなってしまうたシロウを弟子として雇ってくれたのだ。

「しかし困ったな……」

「え……!?!」

深刻そうな源五郎の表情にエルフの少女は疑問の声をもらす。

不安げにするシロウに源五郎は長いひげに手をそえて酷いしかめっ面を見せた。

「ドワーフとエルフは犬猿の仲なんだよ、それこそ物語が作れるくらいね？ シロウ君が良い子である事は分かっているけど、それでもボクはドワーフ一族のはしくれ、その伝

統を破るわけにはいかないんだよなあ……」

「ええっ!？」

「シロ君には残念だが、この店で君を雇い続けるわけには……」

「そ、そんなっ!？」

丸い目をギョロギョロと動かす源五郎。

明らかにからかっている様子だが、単純なシロウは真に受けてしまう。

最初は生活のために始めた魔道具修理屋の弟子だが、続けていくうちにシロウなりに仕事に対しての熱意が生まれていた。

何より人よりも要領の悪いシロウを叱るでもなく、高い技術を出し惜しみするでもなく、ドワーフらしい忍耐強さと、ドワーフらしからぬ丁寧さで指導してくれる源五郎を尊敬していたのだ。

シロウもいつか自分も魔道具の修理職人として一人前になりたい、そのような思いを抱くようになっていた。

師として敬愛する源五郎から、いらないと言われたら明日からどうやって生きていけばいいのか!？」

「あう、あう、あう……!？」

パニくったエルフの少女は口をぱくぱくさせて涙目になってしまう。



「金田さん、流石にシロで遊びすぎでは？」

「あ、ははは、ちよつとシロ君をからかいすぎたか、メンゴメンゴっ!!」

見ていられなくなったのか、苦笑しながらも源五郎を止めに入るカナメ。

カナメと源五郎は初対面である。

しかし、源五郎がどんな性格なのかは勘のいいカナメには察する事が出来た。

ドワーフのいかつい容姿に似合わぬお茶目さで源五郎はシロウに謝罪する。

でも、今どきメンゴはないよな……と、カナメは密かに思った。

「え、あの……仕事を続けていいんですか？」

「そりゃ、もちろんさ。それどころか弟子として立派に成長しているのに、いなくなられ

たらボクと良子さんが困っちゃうよ〜」

「あ……ありがとうございますう!!」

他人に褒められる事の少ない人生を歩んできたシロウは、感動のあまり本気泣きになっ

てしまう。

「お、おおっ!! シロ君、泣かないでくれ、おじさん困っちゃうよ!!」

言葉こそおどけているが本当に困った様子の源五郎。

ドワーフとはいえ、男は基本的に女の涙に……特に美人さんの涙には弱いのだ。

可憐なエルフの美少女となれば尚更である。

「す、すいません、嬉しくて……」

「お、おうおう、そうかそうか……シロウ君は良い子だなあ」

そう言つてシロウの肩に手を乗せ撫で叩く源五郎。

その行動にスケベ心はなく、純粹にシロウを氣遣つてのものだ。

情に厚い源五郎はシロウの姿が変わる前から、孤独な弟子に対して、このようなスキンシップをたびたび取つていた。

カナメは静かに見守つた。

ドワーフとエルフ、そして男と女であるが、良い師弟関係であつた。

まったく事情が分からぬ第三者が見たら誤解間違いなしの光景でもあつたが。

「パパさくん。そろそろ混む時間なので、喫茶店のほう手伝つて欲しいんですけ……」  
お店の扉を開けて入つて来たのは、そのまったく事情の分からぬ妻の良子であつた。

呼びかけていた良子の言葉が途中で止まる。

それに源五郎も氣づき、見開かれた彼女の目の先を追つてしまう。

良子が見ていたのは自分の逞しい胸……いや、違うぞ源五郎、我が愛すべきワイフが見ているのは小柄なエルフの美少女だ。

恐らく彼女の方向からは源五郎がシロウを抱きしめているように見えたのだろう。

結論付けて誤解を解くために、源五郎は良子の顔を真っすぐに見る。

何かあった時はお互いの目を見て話し合う、そうやって異種族同士の結婚をした源五郎と良子は様々な苦難を乗り越えてきたのだ。

しかし今回ばかりは源五郎も咄嗟に言葉が出なかった。

良子のおっとり美人と言えるふつくらとした顔が……ただ恐ろしかった。

咄嗟にカナメが分け入って仲裁してくれなければ、金田夫婦は結婚十年目にして破局の危機を迎えていたかもしれない。

## 喫茶店カネダ

全ての事情を聞いた良子は、師夫婦の修羅場に半泣き状態だったシロウを胸の中に抱きしめて、「シロちゃん辛かったわね、大変だったわね」と優しく撫でてくれた。

亡き母を思い出させる良子のふくよかな胸の温かさ、そして言葉に、シロウは取り替えっ子病にかかってまだ一日しか経っていない事に気がついた。

シロウは恐怖を覚えた……なぜ忘れていたのだろうか？

異人種、しかも女になっているというのに違和感もなく順応していた事実。

昨夜の事を思い出す……シエルと一緒に風呂に入ったときもなにも感じず、女の体を十五年付き合ってきた体のように普通に洗っていた。

それ以外にも、性別が違えば戸惑うはずの行動が昨日の今日でまったくなかったのだ。

シロウは己が生きてきた足場が崩れていくような不安を感じてしまい、ますます泣いてしまう。

「ああ、泣かないで……大丈夫よ、大丈夫だからねシロちゃん。何かあっても私達が守ってあげるからね？　ね、そうよねパパさん？」

「うん、そうだよ。シロ君はうちの家族みたいなものだ。ボク達がついているから、なにも心配しなくていいからね?」

「うう、えつぐ、りよ、良子さん、げ、源五郎さん……」

抱き合うシロと良子を源五郎の大きくて太い腕がさらに抱きしめた。

三人とも種族は違うが、まるで本物の家族のようであった。

師夫婦の優しさに、唯々、エルフの少女は安堵して美しい泣き顔を見せる。

そんな時である、リリリリリリリッ!! と良子のメイド服のポケットから音が鳴ったのだ

「あ、あら、ごめんなさい電話みたいね?」

良子はメイド服のポケットからスマホを取り出した。

「うん? 葵ちゃんみただけど、どうしたのかしら?」

その言葉にシロウと源五郎は顔を見合わせた。

春日葵——喫茶店カネダにアルバイトに来てくれる良子の親戚の女子大生である。

「はい、はい……え、葵ちゃん大丈夫なの? ううん、こっちは平気だから無理しないで、ええ、ゆつくりと休養をとって体を休めてね。はい、はい、お大事にしてください」

電話が終わったらしい良子がため息をついた。

「どうしたんだいママさん?」

「それがね、葵ちゃん急な熱が出てしまつてバイトを休む事になったのよ」

「あらあ、それは大変だあ……。ああつ!! 今日休日で客の入りが多い日だ!! 二人だと手が足りないよね!」

「え、ええ……。どうしましょう。パパさん!」

先程のシロウに見せた頼もしい姿はどこにやら、途端におろおろしだす金田夫妻。種族は違えど実に似たもの夫婦である。

「あ、あの……。僕が手伝いますか?」

そんな頼りがいのなさそうな二人に、エルフの少女は涙を拭きながら申し出る。

以前から葵が休みで忙しい時は、シロウも喫茶店の手伝いをしていた。

何よりも家族のピンチである……。下ごしらえと料理だしをする程度だったが、いないよりはマシだろうとシロウは考えたのだ。

「え、シロちゃん、そんな状態でしょう? 大丈夫なの?」

「へ、平気です」

「でもエルフで、女の子の慣れない体でしょう?」

「あ、その……。正直に言うとう人間の時より体が軽いです、なぜか分かりませんが」

……。あ、い、いいですよ。カネメさん?」

「ん? ああ、シロがやりたいのなら私は構わないさ」

横で腕組みして静かに見守っていたカナメに了解をとるシロウ。

良子は「ええ、どうしましょう?」と頬に手を当て悩んでしまう。

「まあ、シロ君がこう言ってくれているんだし、折角だし手伝ってもらおうかママさん」

「……そうね。それじゃシロちゃん、申し訳ないけどお願いしますね」

「は、はい、任せてください!!」

自分の豊かな胸をぽよんつと叩くエルフの少女、柔和な眉がキュとあがる。

しかし、シロウの珍しく気合いの入った表情も良子の次の発言で呆気なく崩れてしま  
う。

「それじゃ、シロちゃん用に制服を合せましょうね」

「え……?」

「うふふ、シロちゃん。おばさんはね、年頃の女の子のお洋服の着せ替えとか、着付けか  
一度してみたかったのよ?」

「あ、あの……制服って?」

「メイド服よ。もしも自分に女の子が生まれたら絶対に見てみたいと思ってたのよ  
ね。ありがとうシロちゃん! おばさんの夢が一つかなったわあ」

「え、えええ!!」

エルフの少女の手を握り、上下に振って大喜びの金田夫人の良子さん。

シロウが慌てて師の源五郎に救いを求めれば、整えている髭面の顔、その片目をチャームングにつむり両手で拝む『お願いシロ君』のポーズ。

さらにシロウが救いを求めて見たカナメは苦笑いしながら首を横に振った。

どうやらエルフの少女がメイド服を着けるのは彼らの中では決定事項らしい。

シロウは生まれて初めて着る事となったスカートに……震えた。

生まれて初めて着たメイド服。

スカートは長いのに足がスースーとしていてひどく心細くなる。

パンツが見えるのではないかと心配になるような短いスカートを履く女の子も世の中にはいる。

どうして彼女達は平気なんだろう……シロウはそんな事をぼんやりと思った。

「まあ、シロちゃん、本当に似合うわあ〜!!」

ぱんつと手を叩き、にこにこ嬉しそうに笑う良子。

シロウが着ているのは、ヴィクトリアとか耽美との副題が付きそうなメイド服である。

「あ、ありがとうございます……」

「でも、私のメイド服だと全体的にぶかぶかねえ……。腰の位置が物凄く高いし、葵ちや



んのだと胸がきつくなるので、シロちゃんは日本人離れた体格だわ。骨格そのものがアニメみたいな華奢な感じで人間種とは違うみたい？ 流石はエルフさんねえ？」

「は、はあ……？」

「胸は大丈夫、きつくない？ 腰位置に合わせたらスカートの裾は少し短くなるけど、でもこれはこれで若者らしくていいかな？ 余っているところは安全ピンで止めましようか、後でシロちゃん用の制服も用意するからね。」

「……………」

ハイテンションな良子によるマシンガントーク。

両手を合わせて微笑む良子に、エルフの少女はしなびた梅干しのような顔をしてしま

う。後で制服を用意するって!? ……次もあるのかとシロウは再び震えた。

そんなやり取りをしている二人の前に、現れたのはコック服を着た源五郎だった。

幻想の住人ドワーフ、ピヤ樽体形の源五郎はコック姿が異様なほどさまになった。

「おうおう、シロ君か、どこの美しいお嬢さんが現れたかと思ったよ」

「やっぱり、こういう服は外人さんのほうが似合うわよねえ？」

「そうだねママさん。でもボクはママさんのメイド姿のほうが好きだよ！」

「あら、もう、やだわ、パパさんったら……」

すかさずマイワイフを褒める源五郎、小まめなスキンシップ、これが夫婦円満の秘訣だろうか？

良子も見え透いたご機嫌取りと分かっているもご機嫌になってしまふ。

二人は実にお似合いのおしどり夫婦であった。

そんな甘いやり取りをする源五郎の後ろから、甘くない強面のカナメが現れる。Tシャツにズボンという格好、筋肉で盛り上がった胸にエプロンを着けていた。

190cmという日本人離れた身長と体格のせい、フリーサイズのエプロンがひどく小さく見える。

「お、似合っているぞシロ。お人形さんみたいで部屋に飾って置きたいくらいだ」

「ありがとうございますカナメさん……あの、何でこうなつたんでしょう？」

「さあ？　なんでだろうなあ？」

シロウは現状に納得してなさそうだ。

エルフの少女はロングスカートをカテーシーでもするかのように両手でつまみあげた。

綺麗な生足が膝までで、それだけの仕草でも華麗に可憐である。

珍しく不満じみた様子をだすシロウの頭をカナメは微笑みながら撫でるのであった。

「いやあ、助かったよカナメ君！ まさか手伝つてくれるとは、何でも言つてみるもんだね？ まさに君は喫茶カネダの救世主だ!!」

シロウが手伝う事になったあと、なぜかカナメも臨時の手伝いを頼まれたのだ。

普通に考えて弟子の知り合いとはいえ出会ったばかりの他人に、しかも強面の鬼に仕事を頼むとは……だが源五郎の細かい事は気にしない豪快な性格は、カナメも嫌いではなかった。

「少し大げさですよ源五郎さん。女子……学生時代にレストランでバイトをした事はありませんが、過大な期待はしないでくださいよ?」

「いやいや、この分だと、今日は混みそうだからね。人手は多いほうがいい、なあママさん?」

「ふふ、そうですね。パパさん」

メイドなエルフの少女を見ると、うふふと笑いあう金田夫妻。

何となく察した勘のいいカナメと、よく理解してない鈍いシロウの姿があった。

その日、喫茶店カネダは大賑わいをみせ、開店以来一番の売り上げを出した。

シロウは客としてきた若い男達からスマホの連絡先交換を頼まれて何度も戸惑ってしまう。

苦手とする押しが強そうなりア充でファツシヨナブルな若者達だった。

それ以前にシロウはスマホを持っていない。

しかしそのつど、「うちの妹ですが、なにか問題がありましたか？」と鬼の青年カネメがフオローしてくれたので、対人が苦手なシロウでも何とか仕事をこなす事ができたのである。

## カナメの弱点

シロウが喫茶店カネダでの仕事を終える頃には夕方を過ぎていた。

途中、小さなトラブルがいくつかあったものの、仕事自体は予想以上に上手くこなす事ができシロウは自分自身でも驚いていた。

対人恐怖症の毛があつたシロウだが、店にいた客の視線があまり気にならなかつた。それどころか恐々だが見も知らぬ他人と普通に会話する事ができたのだ。

「シロちゃんにカナメさん、お店を回せたのは二人のお陰よ、本当にありがとうね」  
「特にシロ君は慣れない仕事でもよく頑張ってくれたね」

シロウの性格を知っている源五郎、実はひやひやしながら見守っていたのだ。

「え……い、いいえ！ そんなに大した事はしてないですっ!？」

「それでもないさ、お客の人氣も凄かつたし、だいぶ活躍していたなシロ」

男のときはトロくさくて不器用な様子も、エルフの美少女の場合は恥ずかしがり屋のお嬢さんのようにプラス補正されて見られるらしい。

そのエルフの少女への男女問わずの困ったラブコールに対処してくれたのが、普通に仕事をこなしていたカナメである。

にこにこ微笑みながらシロウを褒める良子と源五郎。

そしてカナメにも褒められてしまい、エルフの少女は嬉しくて耳をピンと立ててしま  
う。

シロウは喜びのあまり、また次も喫茶店の手伝いをする事をあつさりと約束してし  
まった。

そんな安上がりなエルフの少女に鬼の青年は苦笑をしたのである。

金田夫婦に挨拶をして、シロウはカナメと一緒に喫茶店カネダを後にした。

帰り道にシロウ達はスーパ―に立ち寄る。

昨夜から二人に増えてしまった木森家キモリの食料の買い出しをする必要があった。

買い物の途中で、留守番をしている同居人の欲する物を思い出してお酒コーナーに行  
くと、奇跡的に一本だけ置いてあった小さな瓶を手に入れる事ができた。

「ん、それはハチミツ酒か？ 珍しいモノを買うな？」

「あ、はい、その……料理に使うかと思って」

「へえ、シロは自炊をしているのか。ひよっとしてお菓子とかも作れたりするのか？」

買い物カゴを持つ姿が意外と似合うカナメに尋ねられた。

シロウに付き合っつて買い物をしていた彼は、お酒を無造作にカゴの中に入れていく。

「ええつと……お菓子も作れない事はないと思いますしレシピさえあれば」

シロウは母の誕生日にチョコムースケーキを作った事が何度かあった。味はともかくとして、見た目はあまり良くなかったが母は喜んで食べてくれた。

「本当か？ シロは凄いなあ」

感心したようなカナメの声に照れくささを感じて、うつむくシロウ。

ふと見たカナメが持つカゴの中には、麺類やカレーといったインスタントやレトルト食品が大量に入っていた。

「カナメさんはインスタントが多いんですか？」

「ん、ああ……まあ、あとは外食かな」

節制をしているシロウだが、安すぎる食材やインスタントは極力手にしないようにしていた。

天涯孤独の身である、体を壊せば誰も頼る者がいないので健康には気を使っているのだ。

カナメのカゴには他に一升瓶の日本酒と焼酎、そして6缶パックのビール、お惣菜の春雨サラダや肉じゃがなどが入っている。

鬼は酒好きと聞くが独り身の哀愁が漂っていた。

「あの、インスタントとか外食ばかりだと体に良くないし、カナメさんも自炊してみたらどうですか？ 今は専用の調味料とかもあるから料理ってそれほど難しくありません」

「ふむ……」

「あ、例えば肉じゃがの材料のジャガイモ、玉ねぎ、人参や鶏肉の組み合わせは他にも色々作れるし、保存も効くので買っておくと何かと便利ですよ」

「うん、そうだな……」

シロウはカナメの健康を気遣い自炊する事を勧めてみたのだが、ひどく曖昧な返答である。

彼の反応の薄さに余計なお世話だったのかとシロウは思った。

シロウは一人暮らしが長く、母子家庭だったため同年代の者と比べても料理はできる方だ。

数少ない得意分野である、そのため珍しく熱心に話しすぎてカナメを不快にさせたのかと後ろ向きな気持ちになった。

エルフの少女は長い耳を垂れさげてシユンとしてしまう。

「すいません……言いすぎましたか?」

「え、いや、そうでなくてだな」

カナメは太い指で眼鏡のブリッジを摘み上げると、ばつが悪そうに語る。

「どうにも私は料理をする才能ってやつが致命的に欠けているらしくてな……兄達にも家畜の餌と罵られる始末で……なので健康のためにも作らない事になっているんだよ」



インスタントのほうが体に良いレベルの料理ってっ!?

シロウは驚愕してしまうが、レシピ通りに料理を作れない人間は世の中に一定数いるのだ。

「カナメさん、肉じゃががでよければ、あとで作って持って行きますか?」

「……いい、いいのかシロ? て、手作りの肉じゃがだぞ!」

「え、ええ、その程度でよければいつでも?」

カナメの厳つい鬼の顔がぼっーと喜色に染まった。

いつもの彼の冷静ぶりはどこにやら、思った以上の反応と食いつきにシロウは驚いてしまう。

そしてその喜ぶ様子に、鬼の青年の普段の食事情をシロウでも理解する事が出来た。何でも出来る大人に思えたカナメだが苦手な事はあつたらしい。

シロウは世話になってしているカナメにやっとお礼ができると拳をギュと握り、肉じゃがと適当に何かを作って持って行ってあげようと決意したのだ。

カナメとはアパートの前で別れた。彼はこれから野暮用があるのだとか。

たくましい後姿を見送って帰宅したシロウが見たのは、子供のように泣きじゃくるシエルルと焦げ臭い煙をあげているDVDデッキであった。

『えっぐ、えっぐ、わーん!! シロシロ〜!!』

「わ、わ、なにこれっ!？」

シロウは両手の買い物袋を放りだすと、慌ててDVDデッキのコンセントを引っこ抜いた。

思った以上にコードが熱くシロウの肝が一瞬で冷えてしまう。

熱を持ったDVDデッキを抱えて投げるように玄関先に置くと、消化用の水を鍋に汲んだ。

しばらく見ていたが薄っすらと煙が出ているが燃える様子はなさそうだ。

どうやら大丈夫だと安心し、それからグズグズと泣いていたシエルに問いかけてみた。

『な、何もしてないけど、いきなり壊れたのさあ!？』

「えっ? うーん」

彼女の言葉どおりDVDデッキには何かをしたような痕跡は無かった。

恐らくは寿命で壊れてしまったのだろうとシロウは結論づける。

信頼性の高い我らが大日本帝国製とはいえ十年以上前から使っていたデッキである。しかも一年は使用していなかった。

埃が内部に溜まって焼け焦げてしまったのかもしれない。

母から買って貰った物だが形あるものはいずれ壊れる……それに『魔法少女タフ＆クール』のDVDセットは残っている、そう考えシロウはそつとため息をついた。

「ふう、シエルルが無事でよかったよ」

『う、うん……ごめんなのさ……シロシロ……』

シエルルに対して怒る気持ちはない。

ただ安心したシロウは家族の小さい頭を優しく撫でたのだ。

シロウは落ち込むシエルルにハチミツ酒の水割をだしてあげた。

ちよつとだけ飲んでみたが、甘くてお酒というよりハチミツのジュースのようである。

シヨボンとしていた風精霊は思いがけないサプライズに驚き、少しだけ元気になると味わうようにコクコクと飲んだ。

その小さな姿を覗いながらシロウは肉じやがを作りに取りかかった。

食材を切るシロウ、慣れたもので専業主婦並みの手際である。

元々が簡単な煮込み料理であることもあり、流れるような手つきで鍋に入れた食材を火にかけた。

カナメに渡す分も考えて多めの分量で、お酒にも合うようにやや濃い目の味付けで調

整した。

シロウは薄味が好みだが、作りたて肉じやがは食材にそれほど味が染み込まないので問題は無い。

酒のつまみとして母直伝の昆布の佃煮も作ってみた。

久しぶりだが思いのほか上手くでき、それだけで嬉しくなるシロウ。

口に合うといいけど、と思いつながらタッパーに詰め込んだ。

それからハチミツ酒を飲み干したシエルと遅めの夕飯を食べる事にした。

『アタシが悪かったのかなあ……』

シエルル用を買ってきた幼児用の小さなお茶碗。

ご飯の上に肉じやがを乗つけて、スプーンでモシャモシャと食べるシエルル。

朝方の元気はなく、電源が入らなくなったDVDデッキに何度も視線を向けている。

シロウはシエルルのそんな様子を意外に思った。

精霊とは人間の常識が通じない相手である。

しかし、シエルルの気質は人間に近く、まるで物を大事にする日本人のような精神性を持っていると感じられた。

そして――

『折角、エローフプリンセスが出てきたのにさあ……』

シエルルはため息をつき、本当に残念そうに呟くのだ。

エローフ姫ならともかく、変身するエローフプリンセスが出てくるのは第二シーズンである。

風精霊はシロウが出かけている間に、ぶつ通しで『魔法少女タフ&クール』の第一シーズンの二十四話を鑑賞したらしい。

シエルルがそんなに『魔法少女タフ&クール』ハマったのかとシロウは驚いた。

同時にかつて自分が好きだったものを、シエルルも好きになってくれた事に嬉しさを覚える。

しょんぼりとしながら食事をするシエルルを眺めつつ、シロウは近所の家電量販店の折り込み広告のチラシを引っ張り出したのだ。

## ファーストフード

その日、商店街のファーストフード店では、珍しい客が訪れていた。

『シロシロ、これ本当に美味しいのさあ!!』

「うん、勇気だして、お店に入ってみてよかったねー」

『ねね、シロシロ、この照り焼きチキンバーガーをもう一個、もう一個だけ頼んでもいい!?!』

「え、ええっ?」

二人分のセットメニューをテーブルに置いて食事をしているエルフの少女。

ご想像通りシロウト、そして風精霊のシエルであった。

今日のシロウトは、カナメにもらった無地のシャツに女物のズボンという活発的な出で立ちだが、エルフ補正なのだろうか? 不思議と上品でフェミニンな雰囲気である。

そのテーブルの足元には、購入したばかりの電化製品の箱が置かれていた。

『シロシロ、お願い、』

照り焼きチキンを欲し、シエルが小さな手の平を合わせて哀れな声で懇願する。

シロウトは口をムニムニとさせながら、しばらくシエルを見ていたが、やがため息

をついた。

新しいDVDプレイヤーを買うために、シロウたちは商店街の家電量販店を訪れた。そして無事に手にする事ができたのだが……何故かDVDプレイヤーではなく、その数倍の値段がするブルーレイレコーダーを購入していた。

若い男性店員が、高額な電化製品を半額まで下げてくれたので買わざる得なかったともいう。

以前のシロウならば、店員の巧妙なセールストークに乗せられた自分に自己嫌悪をしていただろうが、今は「大日本帝国製、しかも高級品が安く買えたんだから得したと思わなければ！」と微妙に前向きな考えをするようになっていた。

ちなみにシロウは、ブルーレイレコーダーがどういう家電なのかはよく知らない。

そのあと、シエルルがファーストフード店に興味をひかれ、シロウも散財はしたくないけどハンバーガーくらいならばと入ってみたのだ。

しかし、普段はファーストフードどころか、外食する事も碌にないシロウである。

お店に入るのにもドキドキ、注文の仕方がよく分からなくて心臓をバクバク、それでもなんとかお勧めセットメニューを頼む事ができた。

以前のシロウとは違い、清水の舞台から飛び降りるのに匹敵する勇気をだせば、見ず

知らずの他人にも話し掛けられるようになっていた。

微妙に誤差レベルであるがシロウも成長をしているようだ。

そんなシロウの前を通りがかったのは、先ほど注文の仕方を丁寧に教えてくれた店員。

その事に勇気づけられ、シロウは追加注文をするために呼び止めた。

「て、店員さん……………ちゅ、ちゅ、ちゅ……………」

「はい何ですか? ……ちゅ、ちゅ、ちゅ?」

だが悲しいかな、同年代らしき少女相手では中学時代のトラウマは払拭できず、酷い緊張で言葉がどもってしまふ。

それに対して不思議そうな顔をしていた店員はハツとし、そして口元を手で押さえた。

「チュ…………? ま、まさか、キ、キスですかあ!?!」

赤面する彼女に、どうして!?! と、シロウは心の中で悲鳴をあげた。

「ち、違います! つ、追加で注文してもいいですか!?!」

「あ!?! は、はい、失礼しました! ご、ご注文をどうぞっ!!」

「て、照り焼き、チキンバーガーを追加で…………え、えっと、二個です!」

困難に立ち向かうエルフの少女を尻目に、シエルはシロウの食べ掛けのバーガーを



幸せそうにムシャムシャと平らげていたのだ。

「うう……ひどいよシエルル」

『ご、ごめんなのさ……この照り焼きの魔力がいけないのさあ……』

追加注文と共に、サイドメニューの大きなビスケットまでサービスされた。

「いっぱい食べる女の子って素敵だと思います」

頬を染めた店員からそう言われて、風精霊のシエルルが普通の人には見えない事に改めて気づき、そして一人で二人分の食事をとる自分という構図にシロウは切なくなつた。

ともあれ捨て値で購入できたブルーレイレコーダーといい、先程のサービスといい、シロウは男女問わずに魅了するエルフの美貌について、もつと自覚をもったほうがいいだろう。

『ふく食べた、食べたさねえ』

「え、シエルル、もう食べないの？」

『うくん、ごめんシロシロ、もうポンポンに入らないさねえ』

漫画のように膨らんだお腹を、ポンポンと叩くシエルル。

二人分のセットメニューを頼んでしまったが、シエルルは照り焼きチキンバーガー（X3）しか食べない偏食をしたので、テーブルの上にはバーガー以外が二人前ずつ綺麗

に残っていた。

サラダに、コーラ、そしてサービスキットのバスケットである。

これ、持ち帰りにできるんだろうか……。

しかし、何度も店員にたずねるのは……。

シロウが全てを今ここで平らげるか、それとも勇気を出して店員に質問するかの、ど  
うでもいい天秤を揺らしていたとき、お店の自動ドアが開いて外から客が入ってきた。

このファーストフード店は繁盛しているようだが、持ち帰りをする客のほうが多く、  
シロウ達のように店内で食事をしていく者は殆どいなかった。

シロウたちの他には、幅広つばの日よけ帽子をかぶった背広姿の男性しかいない。

入店してきたのは、夏用のスーツ姿の女性と小さい女の子……どうやら親子連れのよ  
うだ。

シロウはその組み合わせが何となく気になって目を向ける。

すると偶然、あるいは必然だろうか、小さい女の子と視線が合った。

その瞬間、シロウの本能が最大限に警戒音を鳴らした。

シロウが照り焼きのチキンバーガーで顔を隠そうとするよりも早く。

「ああ——！！ エローフ姫だ——！！」

公園で出会った幼女のメグちゃんに、顔中を口にされて叫ばれたのだ。

ひえええええ!! シロウは心の中で悲鳴をあげた。

しかも幼女メグちゃんは何を思ったのか、もの凄い笑顔でシロウの元に駆け寄ってきた。

「エローフ姫! エローフ姫! ママー! ここでご飯食べたいー!」

硬直するエルフ少女の腕を取り、メグちゃんは両手で嬉しそうにブンブンと振りまわしながら跳ね飛びた。

シロウの悪夢、再びである。

「メグ、皆さんの迷惑になるから、お店の中では騒いではいけませんよ?」

そう嗜めるのは、きちんとしたメイクの仕事ができそうな雰囲気的女性。

違いますお母さん、そういう問題ではありませんよ!?

シロウのそんな声はもちろん伝わらない。

メグちゃんママはシロウを見ると。

「あ、あら、あなたはあのとときの……うふふ、エローフプリンセスさんね?」

「——!!」

シロウは数日前の黒歴史を掘り起こされて、恥ずかしさのあまりテーブルに顔を突っ伏した。

「ごめんなさいね、一人でくつろいでいるところを」

「いいえ、問題ありません」

そしてメグちゃん母子と、何故かご飯と一緒に食べる事になった。

「あら、木森<sup>キモリ</sup>さんは日本語が上手いのね？」

「……………」

メグちゃんママこと船場<sup>センバ</sup>香奈子<sup>カナコ</sup>さんにとって、エルフは外国人粹らしい。

「ねね、エローフ姫、これ、たべる？」

メグちゃんこと芽久<sup>メグ</sup>に、シロウは六ピースパックのチキンを差しだされた。

そんな幼女の善意にシロウの心が温かくなる。

「ありがとうメグちゃん、でも、自分の分があるから大丈夫だよ」

今のシロウには、二人分のセットメニューを片付ける使命があるのだ。

「えー、これ美味しいよお？」

「メ〜グ、あまりエローフ姫を困らせちゃだめよ？」

「う〜ん……………はい」

救いの手はメグちゃんママ。

彼女は、シロウの前に置かれたサラダやビスケットなどを見ながら。

「それに、こんなに注文してますものね？」

「これは……その……店員さんに勧められて、色々食べたくなって、つい……」

「ああ、うんうん、何だかわかる。木森さんって少し流されやすいからね、うふふ」  
「うふふ」

メグちゃん母子はそっくりな表情で、うふふと笑った。

少しどころか、かなり流されやすいシロウとしては返す言葉がない。

「でも、木森さんに会えて良かったわ」

「え、な、何ですか?」

「メグったら、あの日以来、エローフ姫、エローフ姫ってうるさくてね。本物に会えたのが、よほど嬉しかったのね」

「本物って……」

メグはチキンを手に持ったまま小さく口を開き、不思議そうに宙を見あげている。

その視線の先では、シエルルが空中で、ベリーダンスもどきを踊っていた。

「うふふ、この子ね、あのときの動画とか、暇さえあれば毎日観ているくらいなのよ」  
「動画ですか?」

「ええ、ちよつと待ってね……これなんだけど」

そう言つて加奈子がスマホを取りだし操作して、映っている動画をシロウに見せる。

普段、縁のない類の文明の利器に、おっかなびつくりで画面をみるエルフの少女。

「え、ええええ!!？」

シロウは紫水晶色の瞳を見開いて驚愕した。

動画タイトル「二次元から本物のエローフプリンセス現れる!!」

スマホの小さな画面の中では、胸だけパツンパツンなよれよれTシャツにスウエット姿のエルフ少女が、空中でくるくると可憐に回転し不思議なエフェクト(?)をまといながら。

『ハートフルセクシーダイナマイツツ!!』

と、美しいドヤ顔で決めていたのだ……しかも肉声つきである。

このエローフプリンセスとやらは、間違いなくあの日のシロウであった。

「ハ、ハ、ハ……!?!」

エルフの少女は声にならない。

「エローフプリンセス！ エローフプリンセス！」

『エロプリ！ シロシロ、エロプリなのさ!!』

甲高い声をあげたのは、動画に気づいたメグちゃんとシエルルの二人。

加奈子からスマホを受け取って、器用に操作し再生させるメグとその肩に乗るシエル

ル。

シロウがクルクルと回る動画に、二人してきやきやとはしやぎだした。

「これ、え、なんで？ え、なんでなんで？」

シロウは逆に顔面蒼白となる。

その様子に加奈子が。

「あ、あら、これは木森さんが、自分で投稿したものではないの？」

「ち、違います！ 僕はこんな恥ずかしい姿を人に見られたくはありません!!」

おお、ボクっ子？ などと呟く加奈子。

「あ、あの、船場さん、これって消す事は出来ないのですか？」

「ええつと……本人が承諾してないのなら、肖像権？ とかプライバシーの侵害で消してもらう事は可能だとおもうけど……」

「じゃ、じゃあ……!」

勢い込むシロウに「あーでも……」と言いながら加奈子は、テーブルに置かれたスマホの動画下部をちよちよいと操作する。

そこには八桁にも迫りそうな勢いの再生数と、呆れるくらいコメント数。

美しいとか、可愛いとか、萌えとか、素晴らしいとか。

野生のエロプリとか、リアルエロフとか。

善意的なコメントが多いが、シロウにとっては痛い言葉が羅列されている。

頭がくらくらとしてきた。

「これだけ観ている人がいると、動画自体がコピーされて拡散していると思うから、木森さんには災難ですけど……完全に消すのは無理かな？」

「ハートフルセクシーダイナマイツツ!!」

『ハートフルセクシーダイナマイツツ!!』

エローフプリンセスのファンの子な二人の声が重なる。

動画の中のエルフが、シャランと決めハートポーズをとっていた。

「そ、そんなあゝ」

リアルエローフプリンセスこと木森シロウは、頭を抱えて涙目になった。

「シロシロお姉ちゃんまたねー!!」

「うん、またねメグちゃん」

ファーストフード店の外。

ぶんぶんと手を振るメグに、シロウも小さく手を振り返した。

「木森さん、今日はお話ができまして楽しかったわ」

「こちらこそ、とても楽しかったです」

「また、一緒にお茶でもしましょうね」

「は、はい、ありがとうございます！」



なぜか畏まってお礼をいうシロウに、うふふと笑う加奈子。

『ばいばいなのおさー、メグメグ!!』

去つていくメグちゃん母子に、シエルルが空中で両手を振っている。

その様子に、シロウは疑問に思っていた事を聞いた。

「あのさ、メグちゃんつて……シエルルの事が見えていたの?」

『ああ、たぶんぼんやりと見えて、アタシの声も聞こえていたとおもうさね』

シロウは、メグからいつの間にかシロシロお姉ちゃんと呼ばれていた。

「そうなんだ……メグちゃんつて才能があるのかあ、凄いなあ……」

精霊は魔術素養のある人間しか見えない、そう考えてのシロウの発言だったが。

『たぶん違うと思う。あのくらい年だと、アタシらの事が見える子が多いんだけど、大人になっていくと大抵は見えなくなつて、見えていた事自体を忘れてしまうのさ』

「へえ……」

永遠の子供<sup>ピーターパン</sup>つてやつなのかな?

あるいは自分も、小さいときは精霊が見えていたのだろうか?

そこでシロウは不意に思い出して気がついた。

人見知りの激しいシロウが、加奈子にそれほど緊張感を覚えず普通に話せていたわけを。

あの手をつなぐ二人の後ろ姿は、かつての、幼い頃の自分と母の姿でもあったのだ。

「…………お母さんかあ…………」

久しぶりに口にした言葉は、懐かしくてほろ苦かった。

『うん、どうしたんシロシロ?』

「何でもないよ、シエルル、帰ってタフ&クールを観ようか?」

片手に持ったブルーレイレコーダーの箱を持ちあげ、エルフの少女は微笑んだ。

『おお、続き続き、観る観るさあ!!』

大喜びする風精霊。

そうしてシロウとシエルルは家路についた。

## 帽子屋

カナメは商店街の裏道に足を運んでいた。

建物と建物の中に挟まれて存在する舗装もされていない狭い場所だ。

そんな小道を巨漢の鬼の青年はゆっくりと、何かを探るように歩いている。

「む……」

やがて目的のものを発見したのか片膝をつくど、道端の変哲もない石を手を取った。

裏返す……やや平べったい石には複雑な文様が描かれていた。

「変形しているが、やはり、似ているな……」

シオルダーバッグから革製の袋を取りだして、その中に石を入れる。

カナメはそうやって、目的の場所に辿りつくまでに三個の石を拾った。

「しかし、これはイタチごっこだな……」

ぼやきながら裏通りを抜けると、やや開けた袋小路にでる。

鬼の目で周辺を見通すが、雑草だらけのそこには、目に見えて分かる異常はない。

カナメは雇い主に、さてさてどう説明したものかと嘆息しながら、眼鏡を外して折り

たたみポケットに入れる。

そして振り向きながら軽い仕草で、裏拳を放った。

カナメの拳と、巨大な炎の塊がぶつかった。

バシユツ！ という空気が抜ける蒸発音が狭い通路で反響する。

カナメは顔を炙る熱量に怯みもせず睨みつける。

果たしてそこには、いつの間にか一人の男が立っていた。

つけてきたわけではなさそうだがと、カナメは両脇の建物を眺める。

男まで十歩ほどの距離だ。

中肉中背の男は、この夏場だというのに背広を着け、幅広つばの日よけ帽子を深くかぶって、丸いサングラスを掛けていた。

パチパチとおどけた様子で拍手をしながら、男はカナメを褒め称える。

「流石は防人の一族、高瀬カナメ<sup>タカセ</sup>。並の術者ならば死んでもおかしくない炎を拳の一つで掻き消すとは、いやはや、鬼神の二つ名は伊達ではありませんね」

「……そういう、無作法者のアンタは何者だ？」

「ああ、これはこれは失礼しました……。しかし、困りましたね。私、貴方と違って、それほど有名でもないのです、名乗っても誰だそれは？ になると思うのですが？」

男は特に素性を隠したいようではなかった。

狭い業界である、言葉通り本当に名の知れていない同業者なのかもしれない。

「病院送りにするにも、アンタの名前を知らないと不便だろ？」

「く、くふふふ、そうですか、そうですね確かに……ではでは、私めの事は帽子屋とでもお呼びください」

そう言つて男……帽子屋は、帽子のつばを指でつかんで挨拶とする。

「それで帽子屋とやら、どういう見だ？　こちらはまだ仕事が残っている。それにこの後、御馳走がまつているので手短に頼みたいのだが？」

先ほど殺されそうになったとは思えないカナメの発言である。

「いやねえ、こちらでも仕事なんですよ。ほら、あなたが拾ったその石、実は私の商売道具でして……できれば元の場所に、さり気なく、そそつと戻して頂きたいのですが？」

対する帽子屋も普通ではなかった。

カナメはシオルダーバッグをポンポンと叩きながら。

「これがアンタの物という証拠は？　仮にアンタが持ち主でも、こんな危ない玩具を馬鹿正直に返却すると思うか？」

「まったく、まったくもつて、その通りです。しかしまあ、この国にはその玩具を必要とし、楽しく遊んでいる若者も少なからずいるものでして……」

「知らん、そんな碌でもないサークル活動など止めてしまえ」

冷めた表情のカナメ、彼の態度はどこまでもつれなかった。

帽子屋は仰々しく溜息をつくど左右に首を振った。

「残念ですねえ、交渉決裂ってやつですか」

「はっ、殺しから入る交渉などお里が知れる」

カナメの鬼の双眼と、帽子屋の丸サングラスの奥の視線がぶつかりあう。

帽子屋の背後が陽炎のように揺らぎ、バスケットボール大の炎の玉が三つ浮かび上がった。

攻撃魔術を補助、制御するための違法魔道具……触媒の反応を察知する事ができなかった。

カナメの顔がわずかに動く。

帽子屋は素の魔力だけで、十分すぎる殺傷力をもつ魔術を発動させているのだ。

それは拳銃も無しで、銃弾を叩いて撃つに等しい危険な行為であった。

「では、高瀬カナメ。始めますよ?」

こんどは律儀な開始の言葉。

カナメは無言で左手を前にだし、右手を腰に引きつけて構える。

「弾けて、舞え」

帽子屋の言霊じゆもん。

炎の玉が高速で、三つ同時にカナメに襲い掛かった。

「しゅっ！」

カナメは左手一本で炎の玉を受け流す。

流れるような最小の動きである。

一番最後の炎に至っては、まるでハエ叩きのように地面に落した。

「牽制とはいえ、こうも呆気なく迎撃されると、私、術者としての自信が無くなって……」

帽子屋は言葉も途中で、慌てて後方に飛びさがった。

その距離や、三メートルをゆうに超える驚異的なものだ。

そして、帽子屋が先ほどいた場所には片膝をついて着地するカナメがいた。

驚くべきは鬼の青年でもある。

カナメは息を吸う一瞬で空を切り、五メートルを超える飛び蹴りを放ったのだ。

「ははっ、これは恐ろしい！ 油断する暇ありませんな」

「ほごくなよ」

大地を爪先で蹴り、カナメはさらに追撃を掛けた。

帽子屋から再び、三つの炎。

その攻撃を回避し、再び受け流し、カナメは帽子屋の動きを観察した。

カナメが弾いて建物の壁に接触した炎は一瞬で消えた……ボヤ騒ぎにならないよう

帽子屋が制御しているようだ。

目を凝らすと帽子屋の体に薄いもやが見える、驚異的な身体能力は魔術によるものか。

攻撃魔術と肉体強化、二つ同時での魔術制御は玄人でもできる者は少ない。並みではない事は一目瞭然だ。

この国の防人の家に生まれて修練し、戦ってきたカナメにも、男の底は容易には見えなかった。

帽子屋が今度は炎の玉を五つ生みだし、立て続けにカナメに放つ。

そうなると流石のカナメも動けず、その場で足止めされ防御に専念するしかない。しかし、帽子屋の炎もカナメの護身に阻まれて傷を負わせる事ができなかった。

そしてそれを見届けた後、帽子屋がカナメに話し掛ける。

「本当は様子見のつもりでしたので、私、すぐ引く気だったのですが」

「……………」

「だがしかしです。高瀬カナメ……貴方は予想以上に危険な人のようだ」

幅広つば帽子の下の顔、その口元が、言葉とは真逆に柔和に笑っている。

瞬間、鬼の青年は、近距離で、吐きそうになるほどの濃い魔力の発生を感じた。

たたっん、カナメはその場で太ももだけをあげる独特な足踏みをした。

「なので、しばらく、動けなくなる程度には怪我をしてもらいましょうか」



「……………!?!」

帽子屋と対峙してから、カナメは初めて後退した。

バシユン! と、カナメの上方から襲いかかる重たい何か。

火の粉が飛ぶ、叩きつけられたのは、形をもった太く長い炎。

鬼の青年にも受け流せぬ、先ほどとは桁違いの熱量であった。

メラメラと燃えあがる炎は、爬虫類の尻尾のような形状をしていた。

熱で空間が歪んでいる、帽子屋の体に絡みつき、姿を現したの巨大な影。

「紹介します、ミスタカナメ。我がサラマンダーです」

「アンタ、精霊の支配者か!?!」

それは火に属する精霊、炎のトカゲ、サラマンダーであった。

「騒ぎに気づく人もボチボチでてきそうですし、そろそろ幕引きと致しましょうか」

サラマンダーから生まれる炎が幾筋もの鞭となつて、カナメに鋭く襲い掛かる。

カナメは狭い道で回避しながら、さらに後方へとさがつた。

紙一重の攻防、しかし、すぐに袋小路まで追い詰められ逃げ場がなくなつてしまう。

鬼の青年はコンクリートの壁に背をつけ、観念したように動きを止めた。

炎トカゲは帽子屋から離れると、六本の太く短い足をバタバタと動かしてカナメに襲

い掛かつた。

質量そのものを武器とした炎のプレス攻撃だ。

ドスンと、上から襲う雪崩のような炎に、カナメは顔の前で腕を交差して防御した。「ぐああああああああああああああああ!!」

皮膚を沸騰させる高温に、さしもの鬼の青年も叫び声をあげる。

サラマンダーの炎の巨体にカナメの190cmを超える長身が覆い隠される。

炎はあつという間にカナメの皮膚を焼き焦がし、そのまま彼が膝をつく、と思われた次の瞬間であつた。

「がああああああああああああ!!」

恐るべき事に、鬼の青年がサラマンダーの体を両手でつかんだ。

そしてみちみちと筋肉を軋ませると、体を燃やしながら、炎トカゲの太い胴体に腕をまわしてベアハッグをしたのだ。

「な、何と!?!」

今度は、サラマンダーの音にでない悲鳴が上がる。

終始、飄々としていた態度の帽子屋もその光景には驚きを禁じ得ない。

「霊体に近いサラマンダーの体を素手でつかみ抱きしめるとは。いやはや……信じられない事をしますね高瀬カナメ」

「そりゃまあ、あれでも一応は神だからな」

「何っ!？」

帽子屋の背後からカナメの声がした。

カナメの拳が、帽子屋が反応するよりも早く、その体に直撃する。

中肉中背の帽子屋が派手に吹き飛ばされた。

「ちっ、浅いか……」

しかし、あまり残念そうではないカナメ。

帽子屋はカナメの攻撃を咄嗟に腕で受け、自らも後ろに飛ぶ事で威力を流したようだ。

だがダメージは受けているらしく、受けた右手が力なく垂れさがって血がでていた。

同時に、炎のトカゲが常人には聞こえない叫びをあげ、最初から存在していなかったかのようにかき消えた。

そして帽子屋は狭い裏道で、二人のカナメに挟まれる。

「つつ、なるほど……そういう事ですか、それが鬼神の二つ名の由来ですか」

何かに気がつき納得する帽子屋、その顔は僅かに歪み、痛みを感じているようだ。

カナメが……サラマンダーを抱きしめて重度の火傷を負ったほうのカナメの体が、ポロポロと皮膚を剥がすように崩れ落ちる。

それは灰になり、場に立っていたのは一人の小柄な少女であった。

和風な衣を纏い、氷のような美貌には静けさを湛えている。

濡れ羽の黒髪と額には二本の鬼の角。

「私と雇用契約を結んでいる鬼神アフラだ」

カナメの紹介に、黒髪の美少女——鬼神アフラは無言でコクリとうなずいた。  
神と雇用契約？

そのあまりにもな説明に帽子屋は呆気にとられ、そして笑い出した。

「くふふ、はははつ、いやはや、流石は長き時を刻んできた日の国だ。柱の陰にも神がいるなどと言われているだけの事はありますね」

「神様だけはある余っている国だからな」

八百万もいるし、と、カナメは心の中で付け足した。

「いつから切り替わってました？」

「アンタがサラマンダーを出そうとしたときかな」

「……鬼神に自分の姿を擬態させて、その間に貴方は隠形で姿を隠し、私の背後を取るまで気配を消していたのですか」

「ま、そんなところだ」

カナメは帽子屋に近づきながら質問した。

「で、どうする？ 私に連れられ自分の足で病院まで歩くか？ それとも気絶させられ

て運ばれるか？」

カナメは握った岩のような拳を見せた。

「ははっ、どちらも遠慮願いたいです。そういうわけで、そろそろお暇させて頂きますよ、ミスタカナメ」

帽子屋はニヤリと笑うと、帽子のつばを指で挟んで持ちあげた。

その途端に帽子屋の体が炎に包まれて一瞬で燃えあがる。

炎はすぐに収まった。

残ったのは焦げ目ひとつない幅広つばの日よけ帽子だけであった。

「やれやれ、難儀な奴だった……」

そう言つてカナメは、拾いあげた帽子を自分の頭に乗せる。

額の角が帽子のつばに微妙に引っかけたり、カナメは顔をしかめた。

帽子屋を捕まえる事は、特に考えてなかった。

少し痛めつけた程度で情報を吐き出すようなタイプには見えなかったし、まだ奥の手を隠し持つていそうな感じだったからだ。

カナメは戦闘狂というわけではないし、わざわざ無用な危険を冒す趣味もない。

——奴と会つた事が、ある意味では有益な情報か。

「まあ、あとの事は龍王寺のほうで調べてくれるだろう」

そう思案するカナメのシャツが、くいくいつと引つ張られる。

見ると鬼神アフラがカナメを見あげて何かを言いたげに立っていた。

「……お神酒……」

「あー、はいはい……」

カナメはショルダーバッグを探った。

取りだしたのは変哲もないワンカップの日本酒である。

その容器をアフラは両手で包むように握った。

「……御馳走様……」

アフラは微笑みながら口の牙を見せて、次の瞬間には姿が消えた。

カナメの手にはフタを開けていない、中身だけが綺麗に消失したワンカップが残った。

鬼神アフラへの報酬はリーズナブルである。



カナメは築三十年は超える古びたアパートに戻ってきた。

手に持つのは商店街で購入した一升瓶の日本酒。

未成年への手土産としてはアレだが、飲み残ったら料理などに使ってもらえばいい。軋む階段をあがって直ぐの部屋、標識には「木森」の文字。

扉をトントンと軽く叩いた。

「シロいるか？ 約束通り、夕飯を馳走になりに来たのだが」

『あ、はい、カナメさん、今開けますね！』

たたつという足音。

カナメは扉の前から一歩下がって待機した。

「お待ちせしました！」

予想通り勢いよく開かれる木森家の玄関扉。

姿を現したのは、白銀色の髪と紫水晶の瞳、そして長い耳が特徴的な少女。

鬼の青年の隣人、最近エルフになったばかりの木森シロウだ。

その容姿に関して言えば美少女だな、と思う以外にカナメの感想はない。

「こんばんはカナメさん、上がってください」

「お邪魔します、これは手土産だ」

「あ、ありがとうございます」

カナメが持つてきた一升瓶を、両手で受け取り礼を言うシロウ。

そしてカナメを見あげると不思議そうな顔をする。

「ん、どうしたシロ？」

「あ、いえ、カナメさんが帽子を被るのは珍しいなと思って」

「ああ、これか……まあ、そうだな」

大抵の被り物は、鬼の青年の額の角に引っかかるのだ。

カナメは帽子を片手で外すと、エルフの少女の頭に乘せた。

「わわっ!？」

「これはシロにあげよう。つばが広いし、耳隠しにでも使ってくれ」

「は、はあ？　ありがとうございます？」

カナメは、何故かテレビジョンから流れっ放しだった『魔法少女タフ&クール』の無印を観ながら、夕飯を食べたのである。



# お客さん

仁村雪子にむらゆきこは雪のような白肌を薄く朱に染めて緊張していた。

目の前には重厚な色合いもつ木造家屋。

壁に掛かっている下げ看板にはドワーフ工房カナダの文字と、その横に猫のシルエツトが小さく表示されている。

確かに親友のエっちゃんの言った通りの場所にドワーフ工房があった。

(……どうして猫が描かれているのだろう、カナダさんは猫好きなのだろうか?)

雪子は看板を見つめ、しばし彼方へと思いをはせる。

そして、おかつぱ気味な頭を振る。

そのように脱線をしてどうでもいい事を想像をするのは雪子の昔からの悪癖であった。

工房の隣を見ると洒落た作りの建物が見える……喫茶店のカナダだ。

雪子が遠目で覗くとオープンカフェの店内には幅広い年齢層のお客さんが入っていた。

こちらもエっちゃん情報なのだがその店には時々、恐ろしいくらいに綺麗なエルフが

メイドとして働いているらしい。

しかし、その話に雪子は疑いをもっていた。

幼馴染でもあるエッチちゃんは普段は良いやつだが、思い出したように雪子を騙してケケと山姥のように笑うのだ。

雪子も中学二年である、いつまで騙されるようなピュアなお子様ではない。

「エッチちゃん、流石にエルフさんはないよ、ドワーフさんのお店で、仲の悪いエルフさんがメイドさんしているなんて絶対ないよー」

エッチちゃんは、えーという顔をしたが雪子は取り合わなかった。

それにこんな片田舎に異人種の中でも超希少種であるエルフがいる事自体が眉唾なのだ。

田舎にいる異人種というのは、猫耳系の獣人くらいなもので希少種自体が滅多にいない。

むしろ河川敷で日向ぼっこしている猫神さまを見かけるほうが多いくらいだ。

(あれ、どちらもネコ耳のお爺さんだ……ひよつとして同一人物?)

雪子はまたどうでもいい想像をしてしまう。

気を取り直し、雪子はドワーフ工房の分厚い扉の前に立ちドアノブに手をかけようとしたところで不意に不安に襲われる。

念のため学生鞆を探ると、果たしてそこにはハンカチに包まれた大事な品が入っていた。

「ああ、よかつたあ、ちゃんとあつた」

心配性で忘れ物の確認は最低でも二回はする雪子はため息をつく。

こんな一見さまお断りな雰囲気のお店に一人で入るだけでも緊張するといふのに、肝心の修理を頼む品を持ってきてなかつたら赤つ恥どころの話ではない。

ましてや、このお店の主は看板どおりなら頑固で不愛想で有名なドワーフのはずだ。

そんな事になれば「小娘があ！ 冷やかしはお断りじゃあ！」などと言つて金づちやボールのような凶器をブン投げてくるかもしれない。

恐ろしい想像に雪子は小柄な体をふるふると震わせた。

彼女のドワーフのイメージは怒り狂いながら皿をパリンパリンする工芸家であつた。別に工芸家も怒つてパリンパリンしているわけではないのだが。

「どうしよう帰ろうかな……」

怖くなつて眩くと雪子の中の天使が、それがいいかもとささやく。

彼女の心の天使さんはいつだつて後ろ向きだ。

「ばあちゃん……」

しかし、優しい祖母の柔和な顔が雪子の脳裏に浮かんだ。

普通にしても「何か良い事あったの？」と聞かれる雪子の表情がキュと引き締まる。

やや下膨れな頬をもつ彼女は祖母似であった。

「ばあちゃん、私がんばるよ！」

決意した雪子はドワノブをつかむと木製の扉を思いつきり開いた。

取り付けられていたドアベルがチリンチリンと大音響を鳴らす。

雪子は大層驚いて……そして小柄な体をさらに小さくして、こそこそと店内に入ってしまった。

「あ、あの、ご、ごめんくしゃい……ごめんください！」

噛んだ……噛むほどにガチガチになって挨拶したが、明るい店内には誰もいないようだ。

エアー音がした。

微かにエアコンの作動音が聞こえ、見渡すと用途も分からぬ様々な工作機械と作業台、そして魔道具らしきアンティークが壁の棚一面に置かれて並んでいた。

見慣れぬ光景、安堵したのも束の間、雪子はすぐに心細くなった。

面識のない人と話すのは緊張するが、かといって見知らぬ場所で一人待つのも苦痛である。

しかし雪子のそんな気持ちはすぐに杞憂となった。

「は、はい、ど、どちらしやま……どちらさまですか？」

ハーブ弦楽器のもつ音色というのか、そんな美しい声でした。

雪子は鞆を胸に抱きしめ視線を向ける。

静穏エアコンの音よりも気配が薄く、工作機械の影に隠れて姿が見えなかったが店内には人がいたのだ。

「わ、私、仁村イイマス！ ええつ、雪子デス！ そ、それで……」

緊張のあまり、何故か片言な自己紹介から入った雪子。

だがそんな彼女の奇行も途中で止まってしまふ。

意識せずに唇からヒュツという奇妙な声もれ、そして呼吸すら忘れて、雪子は見惚れるという言葉の意味を十四才の年にて初めて知った。

恐ろしいくらいに綺麗な女性がそこにいた。

「ええつと、こんにちは？」

綺麗な女性はゆつくりとした口調で挨拶をすると雪子に静かに微笑んだ。

硬そうな笑顔である……しかし、人目を引く美貌とは真逆の控えめで落ち着いた雰囲気

気に雪子の緊張は解れていく。

怖いくらいの美人さんなのに、全然怖くなさそうな美人さんだと雪子は安堵して同時に。

(うわあ……何だか気恥ずかしい……)

美人さんから見つめられているという、そのよく分からぬ羞恥に視線をそらしてしま  
う。

頬を熱くした雪子が女性をチラチラと覗くと、何故かひどく悲しそうな顔をしていた  
ので、自分の態度で何か誤解が生じているのかと慌てて大声をあげた。

「は、はじめまして！ 改めて、私は仁村雪子です！ 二年二組で、出席番号十七番です  
！」

自己紹介はいいが誰もそこまでは聞いていない。

「え、はい、初めまして、二年二組の仁村雪子さん、ですか？ あの、どのようなご用件  
で？」

「はい！ そ、その……しゅ……修理お願いしたいです！」

「修理……？ あ、魔道具の修理依頼ですね？ すぐに源五郎さんに……店長に連絡し  
ますので、ちょっとだけ待ってもらっていいですか？」

「は、はい……！」

（気がついた、耳長いよ、この人はエルフだ、生エルフだ！ エっちゃん、信じられる？ 本物のエルフさんが今、私の目の前にいるよ！ すんごい美人さんエルフだよ!! お人形さんのように細いしスタイルいいよ！ でもおっぱい大きいよ凄いよエルフさん!!）

雪子は本当に現金な少女であつた。

彼女は別段エルフが好きというわけではない。

テレビジョンや雑誌などに映るエルフを見て美人さんだなど思う程度だ。

そんな雪子でも目の前にエルフが現れて動き喋れば、年頃の娘らしく興奮もする。

「あ、もしもし、源五郎さん……ええ、お客さんです……ええ、はい、はい……」

エルフの女性は工房の電話で店長さんに連絡を取っているようだ。

雪子は勧められた椅子に座ると、再びチラチラと小動物のように観察する。

女性は綺麗な白銀色の髪をポニテで一まとめにして、細いフレームのメガネをお洒落に掛け、作業用らしきデニム地のエプロンを着けている。

その下は七分袖のシャツにジーンズという全体的にシンプルで色気のない格好で、それが逆に働く大人の女性といった印象で雪子には格好よく感じられた。

「え、そうなんですか……はい、わかりました」

少し沈んだ声。

受話器を長耳に当て電話コードを指で絡め、顔をやや傾けながら通話している姿は中学生の雪子の目には知的で凄く大人セクシーに映る。

おっぱいもエプロンを押し上げるほど大きいし。

(私も後数年したら、こんな感じの大人になれるのかなあ……)

そう思いながら雪子は自分の凹凸の少ない体を見下ろして、フツとため息をついた。

やがて、エルフの女性は申し訳なきような顔をして雪子に向き直る。

「あ、あの、店長は今、手が離せないらしくて……コーヒート紅茶、どちらが好きですか？」

「は、はい?」

店長がすぐ来れないという話から、いきなり飲み物の話に飛んで雪子は理解できず疑問を返してしまう。

そんな雪子の態度にエルフの女性も自分の言葉足らずに気がついたのか、付け加えるように言った。

「え、えーとですね、店長が来るまで少し時間かかりそうなので……あ、そういえば仁村さん、お時間のほうは大丈夫ですか?」

「は、はい、時間は大丈夫です、一時間でも二時間でも待てますから!」

勢いよく返答する雪子にエルフの女性は目を丸くすると、笹の葉のように長い耳をわ



ずかに下げ、またあの静かで優しい笑顔を見せてくれたのだ。

(やんだあ、べっぴんさんだっ!?)

こんな美人さんの微笑みを自分一人で独占しているかと思うと気恥ずかしくなる。

雪子はドワーフ工房カネダに来た目的も忘れ、エルフという未知との遭遇にすっかり舞い上がっていた。

「十分くらいで来ると思いますが、それで飲み物はどちらにします?」

「ええっと、紅茶……いえ、コーヒーで……ブラックをお願いします!」

「え、ブラック?」

「はい、ブラック飲めますよ!」

「は、はあ……?」

落ちていた大人なエルフの女性を見ていたら雪子も背伸びしなくなつた。

そういうお年頃である。

豆からひいたらしいブラックコーヒーは芳醇な大人の香りと味がした。

雪子は添えられていたスティックチョコレートを齧り、スティックシユガーを三本つかつた。

## 魔術文字

「いやーめんごめんご、大変お待たせしました！」

源五郎がやってきたのは、シロウと雪子が二杯目のコーヒーを飲み終えたところであった。

小洒落たアロハシャツにスラックス、そしてシロウと同じデニム地のエプロンを着た源五郎だが、どこかファンシーでコミカルな印象である。

そんな彼は椅子に座ってしゃちほこぼる雪子に「おおっ！」と嬉しそうに声をあげた。

「シロウの言うとおり、本当にセーラー服の可愛い学生さんだ！ ボクはこの店の店長の金田源五郎です、よろしくねお嬢さん！」

「は、はじめまして、仁村雪子にむらゆきこです、よろしくお願ひします」

ドワーフとは思えぬほど愛想の良い源五郎に雪子は曖昧な表情を浮かべた。

そしてなにか言いたそうにエルフの少女を見るが、雪子の気持ちを察する事は鈍いシロウには当然できない。

それどころかシロウは年下とはいえ話す機会も少なかった女子に見つめられ、ドキドキして引きつった笑顔を返すので精いっぱいであった。

そのエルフの微笑みは雪子には眩しく映り、また照れて視線を逸らしてしまう。  
(うう……僕は目を背けられるほどキモイ表情をしていたのかな……)

自分に自信のない日陰者のシロウは、先ほどから悲しい勘違いを飽きずに繰り返していた。

何にしても日本中で彼ら師弟よりイメージの違うドワーフとエルフは恐らくいないだろう。

「それで仁村さん、修理して欲しい魔道具だけど、現物は持つてるかな？」

「はい、見てもらいたいのはいこれなんですけど……」

雪子が学生鞆から取りだして、テーブルに置いたのはハンカチに包まれた銀色の円盤だった。

それはなんの変哲もない懐中時計。

一見して大量生産の既製品のようにだが、シロウには魔術的な機構を組み入れた魔道具であると感じて判別できた。

古い物のようだが状態は良く、秒針が時を刻む事を止めていなければ実用品としても十分に使えるそうだ。

「ほほう、これはとても大事に扱われている物のようだね」

「爺ちゃ……祖父の形見で、亡くなった一年前から動かなくなっちゃったんです」

「うーん、この時計は魔道具でもオーダーメイドに近い物のはずだけど、現在の所有者は仁村さんなのかな？」

「あ、違います……その、今の所有者は祖母だと思います」

「ふむふむ、なるほど、なるほどねえ」

源五郎は幾つかの質問をして懐中時計を手に取ると、耳に当て指で軽く叩きだす。

反響音だけで内部に故障箇所がないかを調べているのだ。

源五郎の仕事を真剣な表情で見るシロウと緊張した様子で見守る雪子。

そして源五郎はエプロンのポケットからライト付きルーペを取りだし、今度は目視で調べ始めて……と思いきや横にいたシロウに顔をむけた。

「あー、シロウ君、視てもらっていいかな？」

「え、自分がですか？」

「うん、シロウ君のほうがボクより目がいいから、修行と行って、ね？」

（修行って、修理を頼む、お客さんの前で言っているのかな……う？）

シロウが不安に思いながら雪子に目を向けると、キラキラとした強い眼差しが返ってきた。

「ぜひ、ぜひ、お願いしますシロウさん！」

「ええつと……はい、わかりました……」

何故かニコニコしている源五郎からシロウは懐中時計を受けとる。

(う、あまり見つめないでほしいな……)

雪子の期待のこもった視線はシロウとしてはひどくやり難い。

懐中時計を明かりにかざして見る。

機械的に壊れているのなら源五郎が直ぐに分解を始めているはずだが、しかし師は視てくれと言った……だとすれば故障の原因は魔術文字だろうか？

シロウがそう考え、視るために作業用メガネを外すと紫水晶の瞳が現れる。

その神秘的な色合いに「わあ……」と雪子が驚きの声をあげたが、すでに集中し始めたシロウには聞こえない。

シロウは懐中時計の表面に細い指を添わせ、決められた手順で魔力を慎重に流しこむ。

魔術文字(漢字ベースのようだ)が何重にも浮かんでは消え、人間のときには読み取れなかった細かな情報までもがシロウの脳内に入ってくる。

エルフの眼は視えすぎるため、通常の作業では視力を落とすメガネが必要なほどだ。

その解析能力を機械的な手法で再現しようとする何億円もかかる設備が必要なのだが、シロウは自らの目の価値にはまだ気づいていなかった。

「時計が……光っている」

そう口にする雪子には懐中時計がぼんやりと発光している程度にしか分からない。しばらく魔術文字を視ていたシロウだが違和感を覚えた。

魔道具の魔術文字とは仕掛けを制御し、言霊じゆもんによる命令を実行するためのものだ。

例えば電源スイッチのような機能を持つ魔道具を動かすには「点ける」「消す」という意味の魔術文字が必要となる。

シンプルな魔道具なら使用する魔術文字は少なくて済むが、複雑な機能をもつものとなれば魔術文字の量は当然増えていく。

(……ああ、そうか、ただの時計に使うにしては、文字が多すぎるんだ)  
機能に対して明らかに過剰な文字量、それが違和感の正体だった。

ではこの時計に時を測る以外にどのような機能があるかはシロウでも分からなかった。

魔術文字がちよつとした辞書ほどの量があり、全体が把握できていないからだ。(でも、文字に変な癖がないし、構成もシンプルだから……僕でも読み解けるかな?)

懐中時計に刻まれている魔術文字は教科書のお手本のような綺麗な構成である。

パズルのように難解な表現を芸術的価値として喜ぶのはコレクターだけであり、実用品として修理や調整する職人からしてみれば、このように簡潔で分かりやすいほうが好ましい。

シロウはより深く知るために感覚を鋭利にして必要なもの以外を遮断する。

誰に教わったわけでもないのに何故かそのやり方を知っていた。

検索……そして文字を追い、夢中で読み解いて、いつしか音読するように口ずさむ。

「ラ……ララ、ララ……ラララア——」

懐中時計の奥底で眠っていた魔術文字の群はシロウによつて音として世界に再現され、羅列はやがて美しい歌詞へと変わっていく。

歌に呼応するかのように魔術文字の輝きが増し、常人でも認識できるほどの光を放ち始める。

静かに古い時計を手の平に乗せ、魔道具に刻まれた記憶を歌い続けるエルフの少女。

目の前に現れた幻想的な光景に雪子は声もなく見守った。

しばらくして歌声が止まり、そして光も緩やかに消えていく。

シロウは手にした時計ごと胸を押さえて感動と満足感に溜息をついた。

時間の経過も忘れていた……懐中時計に刻まれた魔術文字の構成が上質な物語のようにならなくて、気がつけば読破していたのである。

おかげで分かった事もあった。

(この時計は壊れてはいない、止まっていただけなんだ)

優柔不断なシロウとしては珍しい事にそうはつきりと断言できた。

時を止めている事も懐中時計の形をした魔道具の機能であると。

それから、どうしたものかと考える。

依頼主の望みどおりに普通の時計として動かすだけなら簡単である。

停止させている魔術文字を二箇所ほど削り取ればよいのだから。

でもそれはこの魔道具の作られた理由に、その存在意義に反するのではないだろうか

？

シロウは雪子にどう説明すればいいか悩んだが、とりあえず源五郎に報告しようと視線をあげた。

すると雪子の幼い顔が直ぐそばにあった。

「え……？」

「え……？」

雪子が木製テーブルに両手をつけて身を乗りだし、シロウの豊かな胸に挟まれた懐中時計をのぞいていた。

そして何故でこんなに近くにいるの？ という不思議そうな表情をしている。

雪子は懐中時計が見せた神秘に夢中になって、惹きよせられるように近寄っていたのだ。

お互いの体温すら感じられそうな距離に沈黙する。



「あの……?」

「きやあつ!? ぐ、ぐめんなさいいいいいいい!!」

雪子は甲高い悲鳴をあげて椅子から転げそうな勢いで後ずさりした。

シロウとしては緊張して焦るより先に中学生女子のテンションに対して、どう反応すればいいのか全く分からない。

「終わったかなシロウ君?」

「あ、はい、一応……原因は分かったと思います」

雪子の一人騒ぎにも動じずニコニコしながら質問する源五郎に、心の中で断言した割には口になすと自信なさげになるシロウである。

「それじゃ、コーヒーでも飲みながら、シロウ君の出した答えを聞こうとしようか? ミルクをたっぷり入れた甘いやつでね」

お茶目にウインクする源五郎の言葉に赤面していた雪子が途端に渋い顔をする。その様子にシロウは引きつった笑顔を浮かべるのであった。